

根小屋式山城日嶽城

— 中世の山城日嶽城跡・古城跡調査報告 —

岱明町文化財保護委員会

はじめに

熊本県北西部の二市二町は、東に玉名市、西に荒尾市、

北に玉名郡南関町、南に岱明町が、いわゆる小岱山の尾根を境に隣り合っている。小岱山は筑肥山地の南端支脈に当り、花崗石の山塊からなる。頂上は筒ヶ岳標高五〇一・四



地図一 三城位置図
凸、上より筒ヶ岳城・日嶽城・古城

mと、その南の観音岳四七三・〇mの二峰に分かれる。観音岳は南東に下って丸山三九一・九mとなり、玉名市内に広く裾を引く。又南南西に伸び、天龍寺を経て岱明町に続いた尾根は、本善坊二一〇・九mより南、日嶽二〇一・三mへつづき、一旦切れようとして古城（以下ルビを略す）九二・四mとなる（地図一）。日嶽の南裾は遠く岱明台地から干拓された水田地帯となって有明海に入る。

筒ヶ岳より古城までの直線距離は約四・二kmである。小岱山南北八km、東西六kmの範囲は、昭和三〇年四月一日小岱山県立公園に指定された。筒ヶ岳・観音岳の頂上と、両山麓には史蹟や名勝が多い。その中で日嶽及び古城には、中世に於いて、玉名郡大野別符地頭の紀（大野）氏が、山城を築いたと伝えられる。本稿はこの日嶽城跡・古城跡調査について報告するのが目的である。

岱明町文化財保護委員会では、平成四・五年度の事業としてこの二つの山城の文献的調査と、遺構の現地調査や、略測図（縄張り図）・報告書の作成等を計画した。別に町では、県の補助を得て、小岱山環境保全事業として、日嶽に遊歩道を整備し、頂上に案内板・方位盤・ベンチ・野外卓等を設置し、平成五年二月二〇日まで完成した。

報告に先立って注意したいのは、「城」というと我々はさすがに、近世第一期の熊本城に代表されるそり立つ石垣や

一 文献調査

手の届く諸文献に、日嶽城及び古城についてどんな記述があるか引用し、簡単な解題と考察を付けた。

1、『肥後文化史の研究』（中川斎著。玉高図書館蔵本の奥付は紛失して、凡例に昭和九年一月二日とあった。）第三編近古史の研究 一、小代山と郷土文化（一）山名の由来（2）小代山より抄出すると、

日岳は小代山の南麓に突出でたる小高き山で小代山の別名ではない。山下の丘陵が開田城であるから其の望見台となつてゐる。それで亀の城（開田城の別名）に対して鶴の城の名がある。日岳の名は上代に於ける放火台の趾であらうと推定されてゐる（以下略）

ここで、日岳（鶴の城）の山下の丘陵を、開田城（亀の城）としてゐるのは誤りで、日嶽城が開田城である（後述）。

2、『玉名郡誌』（熊本県教育会玉名郡支会石井雄蔵 大正一二年四月三〇日。大正初期より昭和初期にかけて、郷土研究の時流に乗って刊行された。）

第四編第二章第三節には、天智天皇の二年六六三年八月、日本の百済救援軍が白村江の海戦で唐・新羅の水軍に敗れたので、翌年防人・烽を設け、大宰府を現在地に移し水城を築いた。更に翌年大野城・基肆城を、そして肥後国菊池

数層の白亜の天守閣を想像するが、県下四〇〇余に上る中の世の城は、そのような大規模複雑、堅固壮大を誇るものではない。

これら中世の山城は、城山もしくはは高城と呼ばれる独立（男山）もしくは舌状丘陵（女山）突端に設けられており、城の施設も自然の地形に若干石垣や土塁・空堀を施した簡単なもので、それに付属した建物も茅葺の掘立小屋状のものが多く、⁽²⁾「ことである。又城郭史で中世と見られるのは、源頼朝の権力確立頃から天正一八年（一五九〇、秀吉の全国統一の年）までの四百年間としてゐる。⁽³⁾

注

(1) ここまでの山名・標高は、国土地理院発行五万分の一地形図玉名による。この以後は、岱明町基本図11の1と3二千五百分の一に依つた。

(2) 熊本県教育庁文化課編『熊本県文化財ハンドブック』（熊本県文化財保護協会、昭和五〇、三、三〇）一四九頁より引用。

(3) 甘粕健編『考古資料の見方へ遺跡編』（柏書房KK、一九八三、六、二五）所収 伊禮正雄「中世城館址の調査」三〇三頁。

（現菊鹿町）に鞠智城が築かれたことを述べ、

玉名郡陸合村日嶽は有明海樞要の地位にあれば海口烽火台の最必要な物であったかと思はれる、日嶽は飛嶽又は火岳であったのを後世文字を吉意に改めたのであらう。

とし、日嶽より東郷村（現菊水町）の飛尾大明神社を経て、鹿本郡来民町（現鹿本町）北方の日の岡より鞠智城に急報したと述べてゐる。又玉名郡内に四ヶ所を挙げた後、天草郡の富岡や三角前岸の飛岳を挙げている。

3、「玉名郡古城道筋山川村高」（正保二年一六四五、一月一七日記録、寛政五（一七九三）年写。三加和町教育委員会蔵。玉名市、平成五、三、三〇『玉名市史 資料篇5古文書』二近世一概况に収載。日嶽城落城の年に最も近い。資料一）天正拾年ニ落城仕当年迄六拾壹年、城主大野左馬助、知行式百五拾町、高ニシテ壹万三千三拾石

一開田村古城 但、山城、木有

本丸 東西式拾五間 南北拾八間⁽⁵⁾

高サ東方百四拾間、同西方百五拾間、同南方百貳拾間、同北方尾続くるわ四百八拾間、南北ノ分ニ横堀有、口式間、なかれ六拾間、深サ壹間、但、木はへ居申候、南ノ方ニ立堀三通り有、口式間、なかれ拾間、深サ壹間、但、木はへ居申候

右に城主大野左馬助の知行と高を述べてゐるが、別項小代

社復刻版上巻より。研究上これらの書は最もよく利用されて
いる。)

日嶽城跡

開田ノ城トモ云。大野氏代々在城也。山城ニシテ今ヤ本丸東西二十五間、南北十八間。高サ東百四十間、西百五十間、南百二十間、北尾根続曲輪四百八十間、南北ノ分ニ横堀アリ。口二間流レ六十間、深一間、但雜木生タリ。南ニ豎堀三条アリ。何レモ口二間、長十間、深十間(注、一間の誤り)、木生タリ。城主大野左馬亮或記山城守、知行二百五十町今高ニシテ一万三千石ニ当ルト云。天正十年落去云々。この文はつづいて村上帝応和二年云々の歴史事項となるが、前掲「古城考」とほぼ同文なので省略する。又この文に掲出の縄張りは、既述の3、「玉名郡古城道筋山川村高」を引用したと思われ、誤りを含んで同じ文である。⁽⁸⁾

上村城跡

大野菊麻呂紀隆村ノ後、紀国隆建武年中当国ニ下リ大野ヲ領シ、後ニ領ヲ三分ニシテ男子三人ニ分与ス。二男築地次郎国秀前原村ノ築地五十五町ヲ領シ、後チ当所ヲモ領シテ当城ヲ築キ在城スト云。終ヲ不知。

9、「玉名郡村誌」(明治初年、国家的に編纂された地誌の内より、田辺哲夫が校訂し、昭和三年二月一五日玉名民報

社より刊行した。付図として別に「玉名郡村図」がある。)

古跡

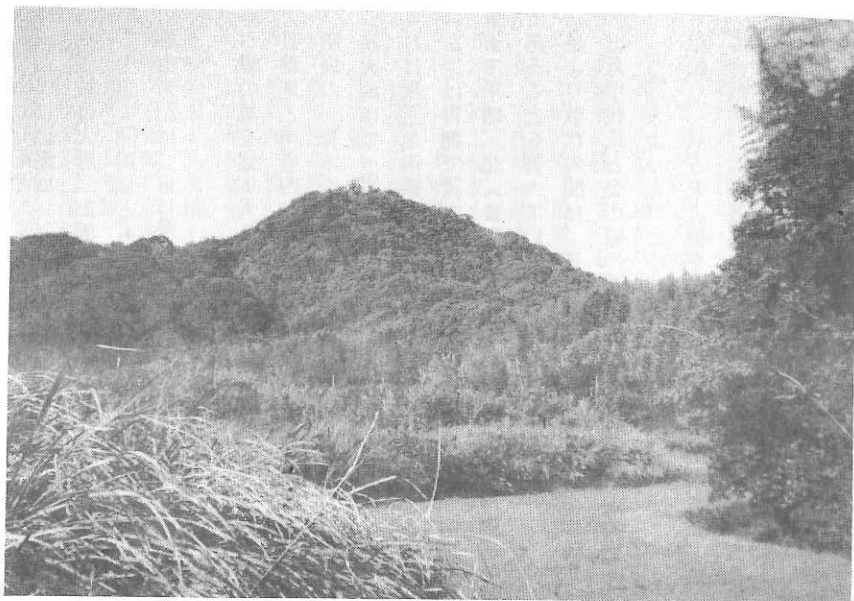
日嶽城跡 開田城共云。村ノ北上ニアリ。本丸跡、上段東西八間、南北九間。東ノ方、上段ヨリ三間落ニシテ、東西十間、南北七間。中段ヨリ二間落ニシテ、東西二十間、南北七間。西ノ方、上段ヨリ五間落ニシテ、東西十四間、南北十三間。各平面ノ地アリテ、北ノ方尾続キ、平地ヨリ高百五十間斗ニシテ、所々堀切跡アリ。今樹木鬱葱ノ地トナル。本城ハ大野氏代々在城ト云。(以下応和三年云々の歴史事項は、既述の「古城考」とほぼ同文なので略。)

右の縄張りは先の3、「玉名郡古城道筋山川村高」とは明らかに違い実地踏査に依ったものであろう。東や西の郭(曲輪)について始めて記述されるなど現状に近い。

なお現在は、日嶽の山は大字開田字小代となっているが、右「玉名郡村誌」開田村の項の小字にも、「玉名郡村図」開田村図の小字にも、小代とはなくて日嶽となっている。何時から、何故小代に変わったかは今後の課題である。

10、「玉名郡誌」(前出)

第三編第三章第一節に下村古城・城村古城・上村古城・高道古城についても記述がある。開田古城については、既に此処に掲出した「古城考」等の引用であるので、別の第四



写真一 日嶽 箱崎八幡宮前より北に望む
右端は陣内の竹藪



写真二 古城 字稻繁の道路よりほぼ東に望む
ふるじょう

(三) 日嶽築城

日嶽城は大野三郎秀隆の築くところである。開田村にあるを以て開田城ともいつている。肥後国大別符地頭職田添由来記に(俗に築城家入注、築地家であろう)の記録といふ。

日嶽の城を建本丸を鶴城と名け二丸を亀城と名く。夫より築地と申者四神相応之地に而先つ陣之内を築き、前は晒表の一標木を見渡し、則前朱雀也。裏は日嶽城に続き候大池にて(中略)

これは現玉名市築地陣内しんないにあった築地氏自身の館が、東(左)は青龍で流水、西(右)は白虎で大道、南(前)は朱雀で平地、北(後)は玄武で丘になった四神相応の適地であることを言っている。⁽⁹⁾なほ引用すると、

是より数代の間は、日嶽城主として栄えしが、天正八年三月小代氏と金山原に戦ひ遂に没落した。田添由来記に(前略)夫より大野と小代と山之諍に而、天正七年より乱相起り、双方矢之根を研ぎ、次第に申分募り出、焼石原に合戦す。大野運之末に而終に者小代に討負、天正十年までに大野八名不残落城し、屋形々々を焼払、一円煙と成し申候。其亀城に籠居被申候四十九人之女即数十代盛之屋形々々焼け申を詠め、殿原は討死、陣々は焼け無程

その周辺一部に限られるようである。

亀城(小城・浮城)

山頂部分は数個の巨岩が堆積しており、楕円形状の二段からなる平坦地(長径二五m、短径一五m)となっているが、北側部分を残し、その大部分はミカン園で開墾されているので遺構の状態は不明である。しかし、山裾には城跡に関連あると思われるような平坦地や、土塁を伴う塹堀が数多く残っている。

ここで始めて、亀城は標高九二・四mの位置と明示されている。平凡社『熊本県の地名』日嶽城跡においても、右と殆んど同じ説明がなされている(写真一及び二)。

12、『日本城郭大系第一八巻 福岡・熊本・鹿児島』

(昭和五四年一〇月一五日株式会社新人物往来社、株式会社創史社編。熊本県の執筆者は阿蘇品保夫外九名。)

この書は熊本県一地区の内、玉名地区は本文に城一五と館三を収載、館の一つは本町内中土館なかつちを載せている。巻末の「その他の城郭一覧」には、本町内では上村城・内野城・扇崎館・高道城・築地次郎国秀館(下前原)と日嶽城が見える。日嶽城の項を次に抄出する。

(城名) 日嶽城、(所在地) 玉名郡岱明町開田字小代、

(事項) 大野氏の居城という。比高一六〇mの「日岳」が城跡。山頂と南尾根に「鶴城」「亀城」の呼称が残る。

是も火を懸申最早難遁し(句読点は筆者、後略)

と四十九池に身を投じたと述べている。今玉名市築地字四十九の四十九池神社西に大きな用水溜池四十九池がある。この投身悲話は、大野氏滅亡を彩る伝承として後世に作られたものである。⁽¹⁰⁾

11、『熊本県の中世城跡』(一九七八、熊本県教育委員会)

熊本県文化財調査報告第三〇集。昭和五〇〜五二年度の調査報告書。日嶽は地図に位置を示すが、縄張り図はない。(ひたけ)

日嶽城(開田城) (玉名郡岱明町大字開田)

大野氏が代々居城していたが、筒ヶ嶽城主の小代氏と不和となり、天正十年(一五八二年)領地境界線争いでついに交戦、小代氏に滅ぼされたという。城跡は日岳の頂上部分(標高二〇八m・開田の集落よりの比高約一六〇m)と南麓の小城(こじろ)の小名を残す小山(標高九二・四m・開田の集落よりの比高約五〇m)から成っている。前者を鶴城、後者を亀城と称する。

鶴城(字小代)

城床の小名を残す山頂部分は楕円形をした平坦地(東西二五m・南北四〇m)があり、中央部に花崗岩の巨岩数個が約二・五mの間隔をもって二群に分かれ堆積する。さらに城床より北側へ一〇m下った所には、長さ八m、幅五m程の半円形状の平坦地が観察される。遺構は山頂と

資料二 部分木 植付願

明治十一年頃、開田村河原嘉一郎が、官山に苗の植付、挿付を願ひ出した願書の案。(河原巧蔵)



13、「郡分木挿付願」(資料二、明治一年頃開田村平民河原嘉一郎入坂下手永御山支配役河原平之允四男。文久二年郡簡、明治になって開田村・庄山村用掛、のち古閑村列六ヶ村書役)が多分県令宛に出す願書の案文。河原巧蔵。)

開田村字イガドノ谷、同字陳内、同字大石ノ谷、走坂(八ノ久保を訂正)、箱崎等の官山計七町五反に、雑木・松・杉・桧計一万八百本を植付、挿付する願書案。地名は地図に照合して、日嶽の南・東・西の一带と思われる。陳(陣)内・イガドノ谷(イガドン谷)・箱崎などが後に出てくるので掲載する。

注

- (1) 上米良利晴編『熊本県神社誌』(青潮社、昭和五六、一〇、一)一〇八頁によれば、この社は、現菊水町下津原二五九九の下津原阿蘇神社である。
- (2) 下中邦彦編『熊本県の地名』(平凡社、一九八五、三、二五)二二六頁に、日の岡山は、山鹿市不動岩(鹿本町来民の真北)の東方菊鹿町との境界標高三一三mの山。古代鞠智城より大宰府へ連絡のための烽火の狼火台があったとする。
- (3) 同編纂委員会『角川日本地名大辞典43・熊本県』(角川書店、昭和六二、一一、八)九二二頁。飛岳^{ひだけ}については、天草郡大矢野町(島)北東部の小円頂丘標高二・八m(東側

に宇土半島より天草一号橋(大門橋が架かる)に、嘗ての烽火台跡があったといい、山名は飛火台の略、火岳とも書くとしている。

熊本県教委『熊本県の中世城跡』二五五頁には、八代市興善寺町興善寺城(前の城)の略測図に、狼煙穴(推定)として出ている。昼は煙、夜は焚火を以て、急用のろしをあげる際に穴を用いたものか。

下中邦彦編『世界大百科事典24』(平凡社、一九八一、四、二〇)二二七頁には、のろし(狼煙)は信号用の火煙で烽火とも書くところある。古代東洋で煙を立ち登らせるため、狼の糞をたいたので、狼煙と書いた。

(4) 徳川幕府の命令による国絵図は、慶長・正保・元禄・天保の四回作成されている。正保の国絵図はその元年(一六四四)に始まり同三年に完成し、郷帳・道帳等と共に幕府に提出されたという(『玉名市史』資料篇1絵図・地図の解説一九一頁)ので、この史料は正しく、この時の国絵図や郷帳等作成の資料であったらう。後世『肥後国誌』の著者が、これを利用した可能性は大きいとの事であった(鹿本農業高校右山幸介)。

成程、「玉名郡古城道筋山川村高」所載の一三の古城の縄張り数値を『肥後国誌』のそれと比較すれば、殆んど同じである。ただ例えば、「小代山古城」とあるのを、後者では「筒

ヶ嶽城跡」と変えたり、又系図や歴史事項を加えただけ詳しくなっている。この利用に際し開田村古城については、前者の原文の誤り、注(5)と注(6)の部分も、誤りのまま引用したと思われる(後述)。

この史料の一部は既に発表されていた。それは、荒尾市教育委員会『浄業寺と小代氏——浄業寺調査報告』(荒尾市文化財調査報告第一集、一九六五、二、二八)花岡興輝編の六〇・六一頁に、万田村古城と小代山古城が収載され、出典は「玉名郡古城跡 正保二年十一月十七日」と出ている。

三加和町教育委員会黒田裕司は、町が昭和四一年頃収集した折、町内の人から寄贈されたのだが、その経過は今では分からないとの事。『玉名市史』資料編5古文書巻末解説には、「会所役人宅に伝来したものとされるが詳細不明。」と出ている。

(5) 第四章注(1)参照。

(6) 同右第四章注(3)参照。

(7) 第一章の引用文献数点は、熊本県立図書館提供資料に依った。解題は『熊本県の中世城跡』に依った所がある。

(8) 本章の注(4)(5)(6)を参照。

(9) 玉東町教育委員会『稲佐城跡』(玉名郡玉東町文化財調査報告第二集、平成元、一、二〇)の四四頁、熊本大学教授北野隆論文に依る。

(10) 同編纂委員会『長洲町史』(長洲町、昭和六二、一〇、一一)二五二頁。

(11) 本町内大字中土寺の前にあるので、ルビはなかが正しい。町指定文化財「中土の六地藏石幢」の真北。今、敷地造成中の「ふれあい健康センター」のすぐ北々西。北辺・東辺に館跡の遺構がある。昔ここを徳次郎丸と呼んでいた。北側道路にも堀と土塁があった(国本国雄七四歳談)。

二 城主大野氏の興亡

第一章に見たように、日嶽城主とされる紀(大野)氏についてその起源から滅亡までを考えてみたい。

紀氏の本拠となる大野別符⁽¹⁾二五〇町は、現岱明町と玉名市の一部(旧高瀬町・旧弥富村・旧築山村・旧滑石村)に広がる莊園であって、後掲年表に見るように、玉名郡司につながる在地の紀氏が、一二世紀頃開発したが、保護を受けるため名目の寄進をして、筑前国宮崎八幡宮を領家とし、更に山城国石清水八幡宮を本家とした。従って荘内鎮護のため、繁根木村と開田村に八幡宮を勧請した。紀氏は開発領主として実質的な支配権を持っていた。紀国隆に至って鎌倉幕府より大野別符地頭に補任されたと考えられる。

又第一章6『古城考』の紀国隆下向云々の記事は、後世

代	時	倉	録
一一四一	仁治二年 六月日		
一一四七	宝治元年 六月二三日		
一一五七	正嘉元年 五月一〇日		
一一六一	かうちやう (弘長) 元年 八月一日		
一一六二	弘長二年 八月三〇日		
一一六八	文永五年 同 九年		
一一七一	文永八年 九月一三日		
?	年不詳		
?	年不詳		

末尾連署三名のはじめに、郡司紀(花押)とある	歴史玉名七号 寿福寺文書 一 肥後国留守所下文 第一小代文書 三 鎌倉將軍下文 第五詫磨文書 七 大谷殿御墓寺々米用途支配状 第五深江文書 一 紀(大野) 有隆証文請取状
大野別符証文、 年の御下文二通、建長四年の御下文四通外、 給わり候い了んぬ	第五深江文書 一〇 詫磨能秀讓状案
御放生会大宮司庄山紀太郎の名あり	第一野原八幡宮文書 一 野原八幡宮祭事簿 第一小代文書
早依嫡々相承道理、任建長四年関東下知状云々	五 関東御教書 北条時宗・政村より小代重俊の子息等あて 玉名市史資料篇5編年史料 (箱崎宮神宝記裏文書)
叔父(築地国秀の二男) 幸親の遺領の安堵と 殺害人の処罰を請う	五一ノ一 築地隆能申状案断簡 同右五一ノ二 築地隆能申状案断簡

一一七四	蒙古(元)軍九州に来襲 (文永の役)	文永一二年 一〇月	(小代重康、野原荘に下るか)	第一野原八幡宮文書 一 野原八幡宮祭事簿 竹崎季長の蒙古襲来絵詞
一一七五	地頭殿御下向、蒙古人沙汰のため	文永一二年 五月二八日	大野小次郎くにたかの名がある	肥前国神崎荘史料 (東妙寺文書)
一一八一	蒙古軍再度来襲(弘安の役)	弘安四年 五月	大野二塚出羽房跡道意 田嶋十郎入道幸円(幸隆)	一四九 東妙・妙法両寺 寺領坪付注文写 (建武二年六月日)
一一八九	この合戦の勲功賞として三人が、肥前国神崎庄に田地・屋敷・畑地の配分を受く	年不詳	大野岩崎太郎に弘安四年の恩賞 大野田嶋十郎幸隆 同右	同右、深江文書・個人蔵 五五 蒙古合戦勲功賞配分状 五七 同案
一一〇五	安富頼泰に、岩崎村瑠璃童女跡を安堵さる	嘉元三年 七月九日	(岩崎村関係は、深江文書中にくつかあるが略する)	第五深江文書 七 関東下知状
一一一五	大野別符内岩崎村地頭職と神崎荘内勲功田屋敷荒野野等を貞泰に譲る	正和四年 八月一三日	(大野岩崎太郎より安富氏に譲られていたものか)	第五深江文書 八 安富頼泰所領讓状
一一二一		元亨元年 八月二七日	しそくいやわう丸に、鍋村にし山田寺半分のちとうしきを譲る	第五深江文書 二・三 紀頼隆讓状(大野有隆子) 紀頼隆
一一三一		右同年 八月二七日	嫡子弥王丸あて、大野別符くみはたはほのちとうしきを譲る(はたはほは庄山の旗布か)	四・五 紀頼隆讓状

南 北 朝 時 代	
一三二四	築地村の内、田地・屋敷などを弥陀女にゆずる
一三三五	けんかうしねん (元亨四年) 六月二六日
一三三六	建武二年 四月三日
一三三八	延元三年 (曆応元年) 七月二五日
一三四八	征西將軍宮懷良親王、肥後國宇土着
一三四九	貞和五年 二月八日
一三五四	正平四年 某月一九日
一三五八	正平一三年 二月九日
一三二四	武吉が阿蘇御嶽大明神御宝殿へ、大野別符内中村一八ヶ所より田地一二町を寄進
一三三五	大野弘隆知行分の関東御下文、淨西・戒善・八蓮・淨円・頼隆・弘隆の讓狀計一三通を受取る
一三三八	大野庄内中村高瀬の一部を清源寺敷地に寄進 菩提寺とする
一三四八	放生会料米を小代方に負担させるか (菊池武光より裁判野口大膳亮殿あて書状あり)
一三四九	政幸より、高瀬長福寺護摩堂へ、尾崎河原田の田地一町一反を寄進
一三五四	第五詫磨文書 七三紀しけたかしやうれん 連署讓狀 大日本古文書家わけ一三ノ二阿蘇文書写一八 菊池武吉寄進狀写、同坪付写 第五深江文書 一三良澄文書請取狀
一三五八	第一清源寺文書 一宍岐守輔重寄進狀(姓欠く、大野一族か) 第一野原八幡宮文書 一野原八幡宮祭事簿 第一清源寺文書 四菊池武尚寄進狀 事蹟通考系図九 歴史玉名七号寿福寺文書 二紀政幸寄進狀

一三五九	正平一四年 六月一日	光隆より、清源寺へ岩崎村内前田六反を寄進 (筑後へ宮方として従軍のためか)	第一清源寺文書 六紀光隆寄進狀 太平記三三卷
一三五九	正平一四年 八月七日	大野式部大輔(乗資)の名が見え、宮方として戦う	
一三六一	正平一六年 八月下旬		
一三六八	正平廿三年 二月一日銘	銘覚俊(紀国隆の孫下築地幸親の子幸長か)の五輪塔地輪を発掘	玉名市教委、平成元年三、三一 報告書浄光寺跡寺域確認調査 昭六二、玉名市築地字陳内蓮華院誕生寺境内より(現存) 歴史玉名一二号門崗論文前原家系
一三六八	應安年中より	前原氏は、前原村・頭波下村にて一一町三段を領知す	
一三七八	文中元年 八月二二日	小代重政へ、子息二人討死の恩賞として、井倉庄分と大野伊勢守跡二五町を預け置く(北朝勢力の回復)	第一小代文書 三三今川貞世宛行狀
一三七二	文中元年 八月二二日	(大野)伊勢守紀光隆入滅、行年三九(前年大宰府にて負傷か)	岱明町上、平等寺跡墓地の五輪塔地輪に刻銘 第一清源寺文書 八近江守平某寄進狀
一三七三	文中二年 八月二三日銘		正平二三(一三六八)年の項に同じ、系図は岱明町地方史に収載
一三七五	應安八年 三月一六日		
一三七五	永和元年 七月一日銘		
一三七七	大野別符中村内田地一町を清源寺に寄進		

室	町	時	代
一三七六			天授二年
一三八一	菊池氏本城(隈府城) 落つ (六月二二日)	一〇月二日	岩崎村一分地頭隆貞より、岩崎中田の田地一反を清源寺に寄進
一三八三	小代重政を野原庄地頭職に補す	永徳元年 一一月一九日	教信と刻銘の五輪塔地輪発掘(系図によれば高道・築地諸太郎幸経で、幸長の子である)
一三八六		銘 永徳三年 五月二二日 至徳三年 二月二三日	第一清源寺文書 一〇岩崎隆貞寄進状 永和元(一一七五)年の項に同じ
一三八八		嘉慶二年 一一月二五日	第一小代文書 三六足利義満下文
一三九二	南北朝の合一	明徳三年 閏一〇月	第五詫磨文書 一三四九州探題今川了俊書状 (外大野別符関係数通あり)
一三九九		応永六年	第一小代文書 三八足利義満下文
一四〇一		六月一日	第一野原八幡宮文書 一野原八幡宮祭事簿
一四〇三		五月三日	第一小代文書 四三足利義満御教書 古城考
一四〇三		同年	肥後国誌卷之九
一四〇三		五月一三日	歴史玉名七号 寿福寺文書
一四〇三		右同日	三大野朝隆寄進状 国郡一統志名社志玉名郡

一四一〇	寿福寺稲荷大明神へ修理田三町を寄進 (この外武橋寄進状九通あり)	応永一七年 一一月八日	歴史玉名七号 寿福寺文書
一四二二	安富泰清あて、肥後国岩崎庄を安堵す	応永二八年 一一月二六日	五藤原(高瀬) 武橋寄進状
一四四一		永享一三年 八月二二日	第五深江文書 三五深江義俊書下
一四六七	応仁の乱	応仁元年	北嶋雪山著 国郡一統志名社志玉名郡
一四七七		文明九年	
一五〇三	高瀬氏八代、武基宇土にて戦死	文亀三年	
一五〇四		永正元年 三月三日	肥後文献叢書三卷所収 新撰事蹟通考卷之二一 熊本史学二八号
一五二七		永正一四年 閏一二月一日	(菊池) 肥後守政隆の菊池氏家臣交名
一五二〇	菊池の正統滅び、大友重治が菊池義武として来る(大友氏の肥後支配のため)	永正一七年	国郡一統志
一五二三	菊池武包追われて、小代重忠を頼り筒ヶ岳に居る、大友義鑑方これを攻む	大永三年	名社志玉名郡
			開田八幡宮を大宮司藤原行統修宮
			一五〇名の中に、大野加賀守弘成・亀甲内蔵介守家の名あり
			(天正に戦死すともいう)
			開田八幡宮を大檀那当職紀忠行、大願主前職紀武行が建つる

代	時	国	戦
一五三三	天文二年	十一月一日	小代重忠あて、計四二七町を宛行われ、小代氏は大友氏に帰属する
一五三四	天文三年		義武は菊池より逃げる、菊池を称する肥後守護職なくなる
一五三八	天文七年	八月日	二月大友義鑑、家臣に殺される、義鎮あとを継ぐ
一五四二	天文十一年	五月八日	菊池義武、隈本城に兵を挙げ、義鎮に叛いたので隈本人数を出せ
一五五〇	同日	八月二二日	同日大津山敗北す
一五五〇	天文十九年	八月	大友義鎮、義武を肥後国より追う、やがて肥後国を平定す
	同日	五月一日	先月二八日小代実忠は、梅尾城を攻めて来た
	同日	五月八日	義武方の三池・大津山・迎春・和仁・東郷衆
	同日	五月二六日	大野等を撃退したので大友義鎮これを賞す
	同日	五月二六日	小代重忠一力にて、去る一日、大野要害を取崩すを賞さる
	同日	五月二六日	前原宗玄、柴尾修理焼石陳にて討死とあるのは、この時か
	同日	五月二六日	(この頃小原鑑元を大津山に城代として置く)
	同日	五月二六日	第一小代文書
	同日	五月二六日	五九大友義鎮書状
	同日	五月二六日	歴史玉名一二号 門岡論文
	同日	五月二六日	前原家系
	同日	五月二六日	熊本県発行
	同日	五月二六日	熊本県史総説編
	同日	五月二六日	第一小代文書
	同日	五月二六日	五〇大友義鑑宛行状
	同日	五月二六日	国郡一統志名杜志玉名郡
	同日	五月二六日	玉名市史料篇5家わけ
	同日	五月二六日	寿福寺文書
	同日	五月二六日	二七神事宮中次第
	同日	五月二六日	熊本中世史研究会編
	同日	五月二六日	八代日記
	同日	五月二六日	第一小代文書
	同日	五月二六日	五三大友義鎮書状
	同日	五月二六日	同右
	同日	五月二六日	五六大友義鎮書状
	同日	五月二六日	第一小代文書
	同日	五月二六日	五九大友義鎮書状
	同日	五月二六日	歴史玉名一二号 門岡論文
	同日	五月二六日	前原家系
	同日	五月二六日	熊本県発行
	同日	五月二六日	熊本県史総説編

一五五一	小代親忠は前年の賞として、下記一三七町他を宛行われる	弘治二年 五月	(長洲館一町・石貫二五町・杜家方七五町 ・鷗尾二町・中尾跡五町、計一三七町、他は略) (天文二三年ともいう)	第一小代文書 六四大友義鎮宛行状
一五五六	小原鑑元ら大友氏に謀反のため誅殺さる	弘治二年 五月	龜甲伊豆入道紀宗善、源太郎あて大野家由緒書上を認む	第一清源寺文書
一五五七	(志賀親安は肥後守護代、親度はその子)	弘治三年 三月吉日	志賀親度(親慶か)あて、前原九町・龜甲二町	四〇紀宗善大野家由緒書上
一五六〇	織田信長、今川義元を討つ(桶狭間の戦い)	弘治三年 三月二五日	・下築地五町等を知行あるべし	続大友史料四
一五七三	室町幕府滅亡(七月)	永祿三年 五月		一六六大友義鎮預状
一五七五		天正元年		
一五七六	信長、安土城に移る(二月)	天正三年	窪大和守紀隆門と刻む	高木瑞穂白山祭礼考
一五七八	日向耳川で大友氏は島津氏に大敗、肥前龍造寺隆信、肥後に手を伸ばす	天正四年	(玉名市山田部落北西の裏山板碑)	昭四七、一熊大困史論叢二
一五七九	もと大友方の小代実忠の梅尾城は三月、龍造寺に攻められ、以後小代氏は龍造寺氏に従う	天正六年 十一月二日 天正七年	(小代親伝、耳川に参戦) (天正五年頃小代氏は一三〇〇町余を領した)	(熊本県の地名、荒尾市)
			四月紀親祐は、城親賢同様別心なしと龍造寺隆信・鎮賢あて起請文を出す	佐賀県史料集成古文書編三
			高良別宮大官司紀親祐とも言う	龍造寺文書
				一四四紀親祐起請文
				川副博著
				龍造寺隆信

代時山桃・土安	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一	一五八一
龍造寺隆信、田尻鑑種に、玉名郡和仁の田中城を攻め落とさず、次いで山鹿・御船・菊池等を平定す	鹿子木親俊、龍造寺隆信に 応ず	城親賢、龍造寺隆信に通ず	親賢より龍造寺隆信・政家 あて起請文あり	連署にて、龍造寺隆信あて 起請文を出す	隆信・鎮賢あて、邪儀ある まじきこと	龍造寺鎮賢等、肥後遠征に 出発す
天正七年 五月	(天正九年か) 二月一八日 天正九年 三月上旬頃	(天正九年か) 三月一七日 天正九年 三月一七日	天正九年 三月一七日	(天正九年か) 三月一七日	天正九年 三月一七日	天正九年 三月一七日
川副博著 龍造寺隆信	第一鹿子木文書 二龍造寺隆信書状 推定	(頭注に、天正九年四月、隆信肥後に侵入し肥後の諸將之に降るとある) 小代親伝の攻撃により、日嶽城・高道城等落城し、大野氏滅亡か 前原道富高路城にて討死とあるのはこの時か	(隆信の長子が鎮賢、のち久家、のち政家) 質人は時分をみて進める、未来際別心あるべからず	(城親賢に仰せられた如く)	(甲斐宗運は阿蘇家の重臣、御船城主)	同右 一七木庭教信・城統勝連署書状 同右 二一甲斐宗運外六名連署起請文 川副博著 龍造寺隆信、年譜 第四小代文書 四城親賢起請文写

一五八一	志岐・赤星・相良・隈部・合志等の、龍造寺あて起請文七通あり	天正九年 六月	(城・赤星・隈部は菊池三家老)	第五龍造寺文書 一三・一三・二四・二五・二六・二七・二八 諸氏起請文
一五八一	小代親伝あて、玉名郡安楽寺の内一三町分を知行あるべく候	天正九年 菊月七日	小代親伝あて、亀甲・立願寺を知行すべし	第一小代文書 七七龍造寺久家宛行状
一五八一	(下の二人は、龍造寺家老中)	年不詳	小代親伝あて、大野之別符二百町領知あるべし	同右 七八家理・信貫連署書状
一五八二	織田信長死去 (六月、本能寺の変)	天正一〇年 二月二七日	玉名郡の内、下長田等四ヶ所より、二二町一反を宛行う(小代殿あて)	第一小代文書 七九龍造寺政家判物
一五八四	三月、龍造寺隆信、島原にて戦死、島津義弘、高瀬に着陣するなど肥後を支配する	天正一〇年 文月二八日 天正一二年 九月	(高瀬へ打入候、小代下柵まで破却候などがある)	第一小代文書 八〇龍造寺政家宛行状
一五八七	大友氏の請により、豊臣秀吉九州平定(五月)	天正一五年	小代親泰に、御朱印地並びに大野上村・下村を預く	玉名市史資料編5編年資料 上井覚軒日記
一五八七	佐々成政、肥後国主	(天正一五年) 五月二五日 天正一五年 六月二日		第四小代文書 八浅野長吉書状写

一五八八	加藤清正肥後北半、小西行長 肥後南半を領す	天正一六年 閏四月	
一五九一		天正一九年 三月二五日	伊勢参宮者七名の中に、相良・城・小代・白 間野等と共に、大野殿とある
一六〇〇	加藤清正、肥後五二万石を 領す	慶長五年 一二月	玉名市史資料篇5編年資料 三四一天正一六年参宮帳
一六〇三	徳川家康征夷大將軍(二月)	慶長八年	

備考
 ・ 典拠の文書は、熊本県発行熊本県史料中世篇第一・第四・第五等に依ったものは、第一・第四などと略称した。
 ・ 歴史玉名第七号所収寿福寺文書は、工藤敬一執筆に依る。
 ・ 南朝年号・北朝年号は、典拠の通りとした。

荒尾野原荘は一一世紀後半から一二世紀初頭に成立し、石清水八幡宮を本家とし、宇佐弥勒寺喜多院が領家となった。小代重俊が地頭に補任されてから、地頭代として一族の塩谷左近将監家盈を派遣するなどしており、重俊の子重泰(重康)が、実際に群馬県入間郡勝代郷から下ったのは、文永の役後とされる(年表参照)。在地の大野氏とは、馴染まなかったらしい。

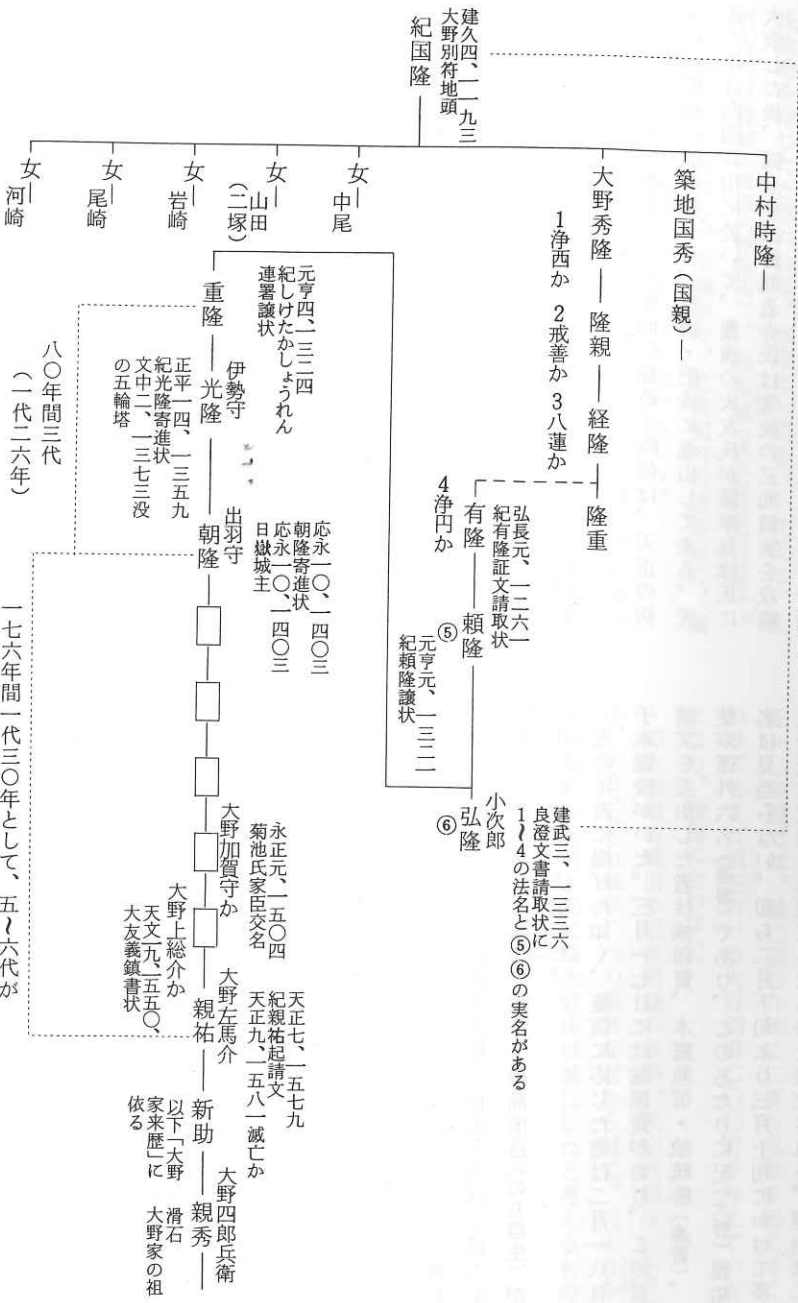
蒙古襲来に際しては大野氏は一族挙げて、菊池氏・詫磨氏と共に奮戦した。大野氏は又菊池氏と共に高瀬清源寺を菩提寺とした。足利幕府に抵抗し、自己の領国を保全しようとする菊池氏と同じ立場に立った大野氏は、南朝方(官方)

となつて一貫して行動を共にした。小代氏は終始北朝足利方(武家方)であった。筑後川の戦いに官方が勝利を得た後、征西府全盛時代には、大野氏も勢力の拡大が出来たと思われるが、征西府が落城し、菊池氏が衰退するにつれ、豊後大友氏その他の大勢力に苦しむ事になる。小代氏はこの間よく時運を見極めて、大友氏・龍造寺氏・島津氏或いは豊臣氏に服属して家運を保ち、文書を伝えた。

大野惣領家や庶流築地氏・前原氏の系図は諸書に収載され、又現存するものもあるが、年表に出した紀有隆や紀親祐の名がなかったり、途中脱落があつて年数が合わなかったりするので、嘗て筆者が考察したものを若干補備して試案として掲げる。

大野(紀)氏系図(試案)

一四四四年間六代(二代二四年)



一七六六年間一代三〇年として、五、六代が
敗戦のため記録を失ったのではないか。

以下大野氏滅亡までを、年表と重複するがやや詳しく述べてみたい。大友義鑑亡き後はその子義鎮が継いだので、対立する菊池義武は隈本城に拠った。これに呼応して肥後の諸豪族(国衆)のうち、三池上総介・大津山美濃守・辺春薩摩守・和仁彈正忠・東郷衆・大野上総介・田嶋宮内少輔・吉弘但馬守などは、天文一九(一五五〇)に小代実忠の守る荒尾梅尾城を攻めたが撃退された。大友義鎮は同年五月筑後・肥後の反対する勢力を討った。八月一日小代実忠は一力を以て大野要害を取崩した。(これは先に大野氏等が梅尾城を攻撃した報復であろう。)これに対し義鎮は、「御忠節之儀、永不可有亡却候」と八月二日付で賞詞を寄せている。大野要害とは、本稿の日嶽城及び古城を指しているに違いない。日嶽城らしいものが文書に見えるのはこの一回だけである。この時の前哨戦が、大野氏庶流前原氏系図「前原家系」に見える前原宗玄及び柴尾修理の焼石陳にての討死ではなかったらうか。

一方佐嘉城を本拠とした肥前の龍造寺隆信は、天正の初めには肥前一国を統一し、筑後・肥後に進出して来る。天正六年日向国耳川に於いて、豊後の大友氏が薩摩島津氏に大敗した後、同七年三月龍造寺氏は筑後の三池鎮実を攻略し、肥後の小代氏に降伏を勧めた。が聞き入れないので鍋島信昌に命じて梅尾城を攻めさせた。小代入道宗禅(実忠)

・親伝父子は筒ヶ岳本城に登り退き、降参した。以後小代氏は龍造寺のため度々出陣し奮闘している。

同七年四月一日龍造寺軍は、兵二万を以て下妻郡(今の八女郡)蒲池鑑広の山下城を攻めるため同郡水田に陣を布いていた。この時「形勢悪しとみた山門郡瀬高上荘鷹尾の高良別宮大官司紀親祐は、龍造寺父子に起請文(「龍造寺文書」所収)を遣わし、投じてきた。」と出ているのが、大野別符地頭紀(大野)親祐の事である。隆信はこの後五月に玉名郡の田中城の和仁氏を降すなど肥後の北部を平定した。薩摩の島津氏も先に耳川の戦いに勝って、肥後への進出を図っており、豊後大友氏も肥後を窺っていた。天正九年二月になってこの両者の肥後進出に先だち、龍造寺隆信は肥後・筑後在陣の将士に肥後進撃の意志を告げて助力を乞い質子を徴させた。龍造寺鎮賢・鍋島信昌(のち信生)が四月九日の出陣に決定した。

先の年表に掲げた如く、隆信に応じた者は二月一八日鹿子木親俊がいた。三月一七日には城親賢があり、この日起請文を差出した者は城親賢、木庭教信・城統勝(連署)、甲斐宗運外六名(連署)であり、このあたりに紀(大野)親祐の名は見当らない。即ち二月下旬より三月上旬にかけて多分大野氏は攻略され滅亡したものと推定される。理由は二月隆信からの、起請文や人質の差出し、或いは軍勢催促に渋っ

たのではあるまいか。報告を受けて、隣接の小代氏に大野氏攻略を命じたと思われる。地理にも明るい小代氏は、大野方の日嶽城(城主大野親祐)、高道城(城主池松水貞胤)、上村城などを攻略し、落城させ、肥後国内の諸豪族に、龍造寺・小代勢の威力を見せつけたのであろう。

四月九日龍造寺勢は山門郡瀬高から北関を過ぎ、大津山へ着陣した時は兵五万、肥後では小代・大津山・城・甲斐等が参陣した。山鹿に至り隈府城の赤星親隆を倒し、内古閑鑑房を降して佐嘉へ帰った。城親賢は四月下旬、小代親伝あて起請文を出している。天正九年六月から一二年七月にかけて起請文を出した肥後の国衆は、志岐鎮経・赤星統家・相良義陽・隈部親泰・隈部親泰と同親永(連署)・合志親為(二通)である。

龍造寺氏より小代氏への恩賞は、天正九(一五八二)年六月と菊月(九月)の外、一二月に、紀親祐の領知であった大野之別符二百町が宛行われている。(これは既に領主のいない事を示す。又合戦が龍造寺氏の命令によらぬ山の境界争い等の私闘であれば、恩賞はなかったであらう。)

大野氏滅亡の時期は根本史料がないため、第一章に見たように、文献によって天正八年・九年・一〇年或いは天正年中と異なっており、又どの説に依拠したかによって異なってくる。

天正八年には、龍造寺方には肥後進撃の動きはない。天正一〇年説では、滅亡前の九年に三度も恩賞を与えること、わけてもまだ領主のいる大野別符二〇〇町を与えている事になり、理屈に合わない。

以上龍造寺隆信や肥後諸豪の動静、又小代親伝(弘治元年、一五五五より親忠)への恩賞などから見て、天正九年の二月ないし三月上旬には大野氏は滅亡したと考えるものがある。

注

(1) 同編纂委員会『日本史用語大辞典』I用語編(柏書房、一九七八、八、一)六〇三頁。

渡辺澄夫著『大分県の歴史』(山川出版社、昭和五二、九、一)四七頁。

右三冊に依って要約すると、太政官符などの文書によって私有地(荘園)として認可された官省符荘に対し、別符とは、国司や郡司が、別の認可書によって新しく荘園と認めた田地のこと。

(2) 玉名歴史研究会「歴史玉名」第一四号(平成五、九、三)

○ 田辺哲夫「伊倉の歴史 上」の中で、一六・一七頁に伊倉別符の開発を、二六・二七頁に玉名郡司紀(大野)氏及び宮崎八幡宮への寄進の事について述べている。

(3) 熊本県教育委員会編『熊本県の中世城跡』二七頁。

同編纂委員会編『角川日本地名大辞典43 熊本県』(角川書店、昭和六二、一一、八)二三九頁。

平凡社『熊本県の地名』一一〇・一一一頁。

「歴史玉名」第一〇号(平成四、九、三〇)八三頁、及び同第一四号(平成五、九、三〇)二六・二七頁の田辺哲夫論文に拠ると、『肥前風土記』景行天皇の一八年六月、九州巡幸の項に出てくる神大野宿弥が、のち玉名の豪族大野氏となる。玉名郡司紀氏とは、この大野氏のことであるとしている。大野氏が何かの縁で、在庁官入紀氏の姓を称することになったのであるうか。

(4) 門岡久著『岱明町地方史』(岱明町役場、昭和四四、九、一〇)紀(大野)氏系図考。

(5) 当時要害という言葉は、城塞、砦というような意味でよく使われていた。『九州治乱記』卷之十一の記事(「歴史玉名、第六号、平成三、一〇、一所収 五一頁)に、筑後国で田尻親種が、主君の大夫義鑑に新しく築城の許可を願出た返事に、重臣入口親廉より「先年要害之儀に就いて云々」とした免許の書状がある。又卷之十二には、「溝口鑑資が要害に押し寄せ戦ふ」「溝口要害之事」「三池外郡今福の要害」(同前五三頁)。その他に用例が多い。

(6) 「歴史玉名」第一二号(平成五、三、三一)所収、門岡

社大宮司紀氏は、瀬高下荘の政所・鷹尾別符の政所・田所・惣公文を兼ねていた。戦国時代祭祀も絶え絶えで昔の勢いはなかったであろうが、玉名郡大野別符紀親祐が高良別宮大宮司を勤めていた事が真実であれば、高良大社大宮司等と同じ紀姓の故に、菊池氏辺りの推挙でもあったのであろうか。

鷹尾神社は、山門郡瀬高町の南西に隣接する大和町鷹尾字馬場の内にある。(鷹尾には戦国時代田尻鑑種の居城があった。)西鉄大牟田線「にしてつなかし」より北約一km、今は有明海に干拓地が広がっているが、昔は矢部川の河口の要衝であったのでこの方面の収入もあった。大宮司紀親祐は海上からも玉名方面との連絡をとっていたであろうが、紀親祐は果して高良別宮大宮司であったのだろうか。

(8) 天正七年四月紀親祐より龍造寺隆信・鎮賢あての起請文(年表参照、歴史玉名第八号や玉名市史料編5にも所収)に依れば、「拙者事、従最前、城親賢同前、無別心中談候」と臣従を誓っている。城氏は飽田郡隈本城主、菊池氏(八代)能隆第四子隆経が城氏を名乗り、その九代の孫が親賢であるから、大野氏とは古くから同志的つながりを持ち連絡もあったであろう。或いは既に早く服属していた城氏に勧められたのかも知れない。

起請文後半には規定の「上梵天帝釈云々」とあって、「殊ニ阿蘇十二宮大明神、倅名字之宗廟磐根木八幡」とあるので玉

久「紀姓大野氏への疑問——前原家系に関連して——」の系図「前原家系」四・五頁に、前原宗玄は焼石陳において討死、その家老職柴尾修理は宗玄の側に在って討死と記す。その年代がはっきりしないが、宗玄の弟善寛の子道富は、大野郷高路城で討死とある。高道城落城を天正九(一五八二)年とすれば、道富と伯父宗玄の年齢差を考えると、約三〇年遡れば、焼石陳は天文一九(一五五〇)年となり、大野要害取崩しの年に当る。

(7) 荒木尚外二氏編『高良玉垂宮神祕書・同紙背』(高良大社、昭和四七、七、一)二三二・二四二頁。

熊本中世史研究会編『筑後高尾文書』(青潮社、昭和四九、三、一〇)二四五・二四七頁。

白井永二・土岐貞訓編『神社辞典』(東京堂出版、昭和五四、一一、一五)一三七頁。

右に依れば、久留米市御井町にある高良大社は、筑後一の宮で、南北朝時代には、ここで両勢力の攻防がくり返されたが、征西大將軍懐良親王の尊信も得ていた。少弐・大友・菊池・島津が「四頭」に任じて、輪番に祭事に奉仕した事もあった。もともと高良大社の大宮司家・座主家はともに紀氏であった。本文中に山門郡瀬高上荘鷹尾の高良別宮とあるが、(上荘鎮守高良新宮は廢絶)旧瀬高下荘鷹尾に下荘鎮守鷹尾八幡宮(旧興社)があり、これが高良別宮で神職は紀氏であった。鷹尾

名郡大野別符紀親祐であることに間違いはない。

(9) 川副博著『龍造寺隆信』(人物往来社、昭和四二、一、三〇)三〇三頁。

同三〇〇頁には「山門郡瀬高上荘の高良別宮大宮司紀親祐の起請文」とあり、三六二頁年譜にも似た文言がある。

千住武次郎編『九州治乱記 全』(一名北肥戦誌。肥前史談会、昭和二三、二、一八 肥前叢書第一輯所収)三一九頁には、「高良山の大神部并に座主鎮興・麟圭・良寛、各一山の衆徒を引連れ来陣す。又紀親祐といふ者、神文を捧げて龍造寺に相従ふ」とある文脈からも、紀親祐に、高良大社関係の手引きもあったのではないかとも思われる。

(10) 同前川副博著『龍造寺隆信』三二二頁、同三六四頁年譜『太宰府管内誌』「筑後国」の項には、「天正九年春隆信当国松延に在陣し軍勢を肥後に差し向く。」とある(歴史玉名第六号平成三、一〇、一、四九頁所収 松岡史による)。「九州治乱記」(前掲)三五六頁には異説があり、「或はいふ、今年(注 天正八年)三月、久家・信生、肥後へ出陣あり」とし、「筑後・肥後旗下の輩、或は神文を送り、或は質入を出す。」と記す。神文はほぼ年表に掲出の如くで、質人は、赤星肥後守・隈部但馬守他五名について述べている。

(11) 注(6)参照。(6)の「前原家系」には高道城で討死した道富の弟弥四郎が前原家を継いだが、「天正年中大野

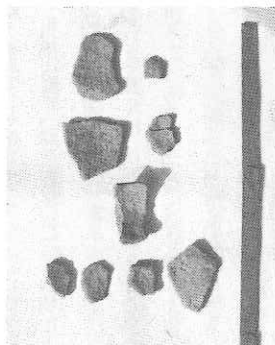
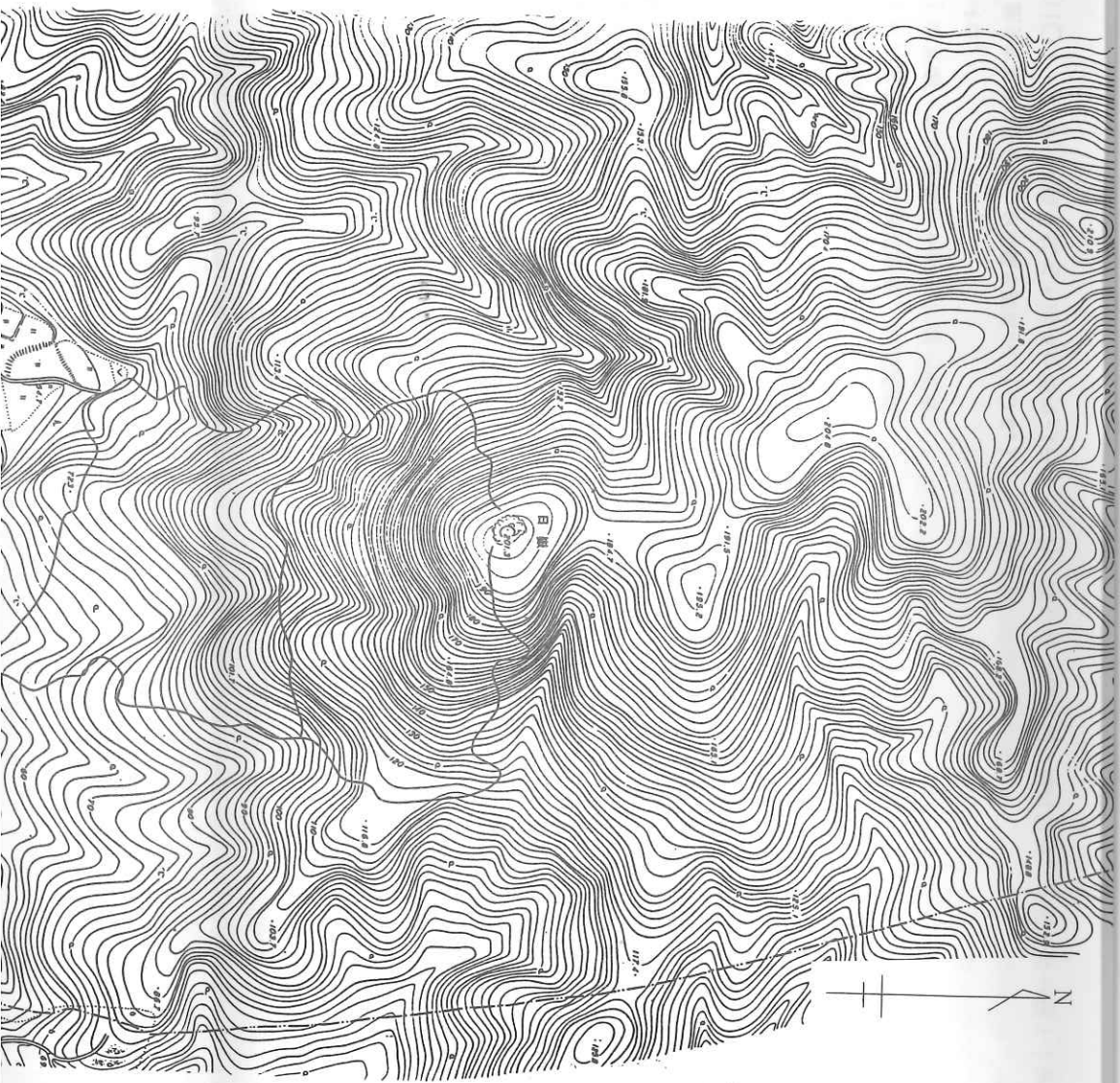
一族没落ノ節、弥四郎モ領知等取失ヒ、此後浪々ノ身トナリ
 (中略) 領知ノ書有之タレトモ、今ハ之ヲ取失フ」とある。な
 お『熊本県の中世城跡』では、上村城(既出)は天正九年、
 日嶽城・高道城(高道字城内、大野氏支城)は天正十年落城
 説を引用し、又下村城(内野城、大野下字内野)にも触れて
 いる。下村城は『古城考』では、斎院次官親能の築城で、龍
 造寺隆信家人在番、天正十年落去としている。

(12) 高木瑞穂「白山祭祀考」(熊本大学国史同窓会発行 国
 史論叢第二集、昭四七、一)の中で、玉名市山田日吉神社の
 祭祀記録(玉名市史資料篇5所収)に、天文二年より慶長七
 年まで七〇年の内、四六年分の記録が保存されているが、天正
 九・一〇・一一年の三年間の記録はないという。これはいま
 での庇護者であった大野氏が、天正九年に滅亡したため、祭事が
 行われなかったと見てもよいのではないだろうか。

三 城跡実地踏査と聞取

この章では、日嶽城跡及び古城跡に分けて、委員で或い
 は単独で数回ずつ行った実地踏査は、紙面の節約上日時だけ
 記し、主として地元古老等からの聞取ききとりについて述べる。

1 日嶽城跡

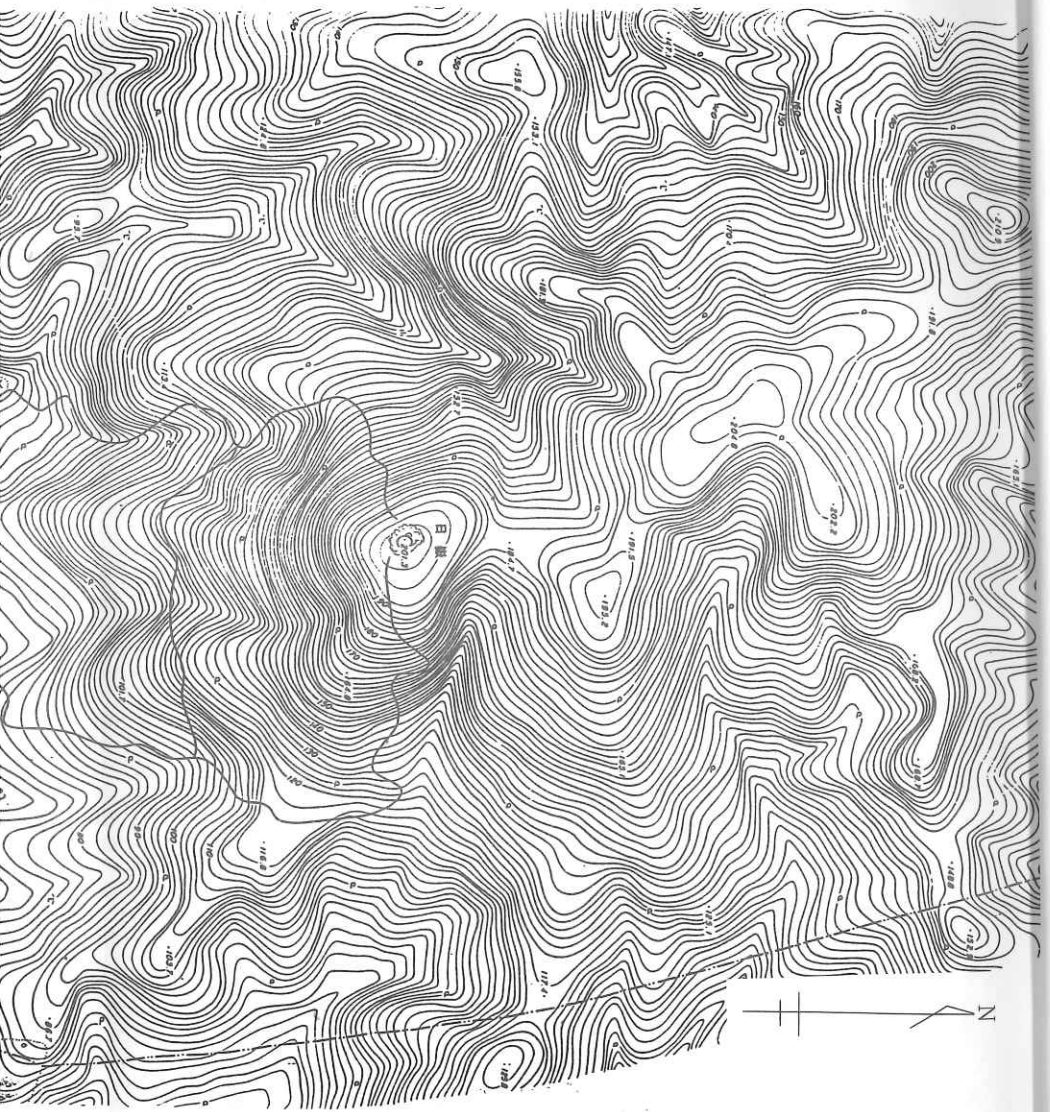


写真三
 日嶽頂上より
 採集した土器片
 上段より採集日順

(1) 平成四年二月一六日凶曇 全日七名で全域。
 岱明町大字開田の箱崎八幡宮東、はたるの里駐車場に午
 前九時半集合。文化財保護委員岡本昭典・河原巧・池上直
 ・村上高久・門岡久、町経済課日嶽整備担当西山俊信、社
 会教育課文化財担当松岡康吉。

北へ二八〇m歩いて登山道分岐点。東廻り七〇〇m、西
 廻り五五〇mと標柱が立っている。一班は折込の地図二の
 東廻りを登る。この道が北進して左折する右手下にイガド
 ン谷がある。二班は西廻り途中より東進、堅堀はなし。三
 班が目指した櫓石やぐらいしは周囲一四・六m、高さ約四・六五m。
 尾根に堀切は認められず。

(2) 翌一二月一七日内快晴 全日単独(門岡)。頂上付近。
 (3) 平成五年三月二〇日出晴 全日単独。頂上西側。
 日嶽頂上巨岩群の間より土器片採集。この巨岩群の最



高所が標高点二〇一・三m、比高一六九・三mである。(比高の起算点は、開田集落のほぼ中央、公民館の標高三二・〇m。) 帰りは西の谷より。

- (4) 四月二一日燹 全日単独。主として頂上西側。
- (5) 一〇月一九日燹快晴 全日委員全員。北方尾根。京都寺谷より峠の廃棄物最終処理場へ出て、本善坊二一〇・九mより、ほぼ南へ日嶽まで尾根を探る。堀切二つ。
- (6) 一〇月二二日燹快晴 全日単独。堀切再調査。

2 古城跡

(1) 平成四年一月二九日燹快晴 全日、委員五名と松岡文化財担当。初めて土橋³を見る。午後は伝左衛門田⁴を横切り古城一周。帰途には開田の山口、植田勝三(明治四一年二月生れ、数え齢八五歳)より聞取。

日嶽はもと火嶽(ヒダケ或いはヒタケ)と言って、ノロシを上げた。イガドン谷が日嶽東の水源だった。日嶽の櫓石は露出した大岩だというのが特別の話は聞かない。古城(フツジョウ、フルジョウ)の城主が戦った話も聞いていない。古城東の旧道は三崎⁵や上からも小麦を粉にひいたり、丸麦や味噌麦を搗きに一ノ口の水車場へ通ったものだ。古城東の旧道下をジガシタ(城が下)と言った。

(2) 一月三一日燹快晴 全日単独。頂上より北へ出

て、帰りは日嶽東廻り道に出る。庄山の井上陽一家三人が斜面の落葉を掻き集めていた。煙草の温床に使ったあと、堆肥にする。三〇年も前は庄山からも八幡宮前を通って、一ノ口の水取入口の方へ廻ったものだ。牛車で薪取りにも来た。今は家庭の燃料も電気やガスに変わって、山の仕事もなくなったと話す。

- (3) 二月三日燹快晴 午後単独。主として頂上部。
- (4) 二月五日燹快晴 全日単独。土橋・堀切。

帰途初めて箱崎八幡宮近くの堀田政一(明治三八年九月生れ、八八歳、台湾巡查を引揚げてより旧陸合村役場勤務)から話を聞くことができた。

日嶽のある小字は日嶽でなく小代。古城は、フルジョウ、フツジョウと言い三角点がある。小字は箱崎。みかん所の河内町の藤森・浜口の二人が二町(二ha)ほどの山を買ってみかん山とした。八幡宮前の道は築地の百間井樋へ抜ける。古城の向う側(東側)の道は伝左衛門田に通ずる。そこは湿田(深田)で、自分は終戦後、田を作った。カンド池とは小さい頃、あの辺り(略測図二の④方向を指差し)を言っていた。古城の東側には明治の頃、陸軍の実弾射撃場と監獄壕(今は埋まっている)があった。八〇年も前で、大正の子供の頃は、遊びに行つて真鍮のタマを拾った。

日嶽や古城の戦さの話は知らん。櫓石の名は知っている

が何をするのか知らん。古城は七〇年も前は、ハゲツパ山で、夕立雨でよく崩れた。赤土で、直径五 cm 高さ二・五 m 位の赤松が生えていた。兔がいて鉄砲撃ちが来た。山の雑木は売って金に換えた。日嶽は茂って黒松が生えていた。大正三、四年頃に、大牟田の円仏の会社が、炭坑の坑木にするといつて、此処に泊り込んで直径二〇 cm 程の黒松を切り出した。

- (5) 二月一〇日 午後単独。古城東側。
- (6) 三月三日 雨曇 午後単独。 堅堀・土塁の複合部。
- (7) 三月四日 雨快晴 午後単独。西側の郭。
- (8) 三月九日 雨曇 午後単独。頂上より東側。
- (9) 四月一日 日 日嶽城跡調査の帰途、堀田に案内され古城へ廻った時の聞取。稲葉屋敷(略測図二、VI郭⑩)には明治から大正四年一〇月まで、稲葉親子が住んでいた。水は下の谷川から汲んだ。小道の横は大畦(広い畦で物を作る畑)の段々畑であった。

河内町の藤森・浜口の兩人は共同で、昭和三七、八、四〇年頃、古城の山を押しこくってみかん山とした。昔此処は石くれの出るハゲツパ山で、松や庭松が生え、自分達子供は石合戦をして遊んだ。頂上への道はなく、ヨゴの木をつかまえて登った。高さ一・五 m の松やヒザカキの木、ヘゴ(羊歯)もあった。竹はなかった。我々二人は話しながら

二人で訪ねた。昔刀や槍があった事は憶えている。先祖や城の話は聞いたことはない。父は雨上りには古城の向うに鉄砲のタマを拾いに行つたと話した。家紋はもっこう(木瓜)との事。正晴六七歳。

次いですぐ前の堀田宅を訪ねた。古城にある畑は大畦(広畦)で、粟・そば・甘藷を作っていた。築地一ノ口には上・中・下流の三軒に一つずつ水車があった。その源流のイガドン谷は、水がよろよろ流れていた。水源にある村の境界石は灰色だった。日嶽への東廻りはうんどこ道路、西廻りはうしの谷道路と言った。カンド池(略測図二の⑭)の北側はジンニヤーと言つた。(陣内の地名が使われていた事を知つた。) ずっと北の本善坊は開田では、ほんじょんぼうずと言つた。ジョウロク(城麓か)は古城の東南一帯の麓を差す。

(12) 一〇月二二日 日嶽の帰り道堀田政一と会う。
この前(九月二六日)来訪の折話したジンニヤーとは、陣内と書くと思うと言つたので、場所を聞くと、⑭カンド池の左手(北側)竹藪を指差して、もとは段々畑があったが、ここ五、六〇年で竹山になってしまった。(この地名は第一章の河原文書にも出ているし、位置から言つて、日嶽城に対する大野氏の居住地、いわゆる根小屋ではないかと思つた。) ⑭の手前、日嶽西の谷から南流する谷川の辺りを、ツツモンと言つていた。筒者と書いて火縄銃と関係があるのか、意味は分から

みかん山を登り切つて、⑯標高点五七・八 m から南の方へと下る。この道は藤森・浜口兩人がみかん山のため造つた私道で、古城頂上へ行く道はなかったが、下を南側⑯方向へ行く道はあった。

古城とか鶴城とか、舞鶴城とかの名は古老から聞いた。古城は大野三郎の一族で、日嶽は小代八郎が居たと聞いた。開田は昔三八戸(明治一〇年頃『玉名郡村誌』では五六戸)で田一八町、畑二四町。戦後の農地解放で生活はよくなった。

(10) 三月二三日 河原委員(六八歳)より。
箱崎八幡宮横駐車場北のみかん畑から、以前阿田之知(七六歳)が土器片を拾つた。そこは古代に人が住み、日嶽城時代の館跡かも知れない。古城南半分から浮田池にかけては、禿げた赤土山で、カヤが生え見通しがよく、子供達がよく遊んだ。浮田池の周りも木はなかった。それが戦前戦後にかけ、県がヤシヤブシを植えさせてから、自然と他の木が生えてきた。古城の東下辺りは畑で、日嶽廻り道の下(南側)は段々畑だった。

(11) 九月二六日 大野正晴・堀田政一より。
正晴宅は開田唯一の大野姓。日嶽城跡や箱崎八幡宮にも近い。天保一三(一八四二)年生れ曾祖父久次郎が庄屋を勤めた(開田宮崎八幡宮九百年祭記録、万延元年一八六〇、八月に当村庄屋久次郎とある。河原委員)といつたので、河原委員と

ぬとのことだった。

この時、開田の開武次(七五歳、堀田宅のすぐ前にある開家より分家がバイクで通りかかったので、呼び止めて話す。改めてジンニヤーの位置を確認。略測図二の⑯をカンド池といつたのではないかと聞くと、そこはカンド池とは言わない。四〇年程前、以前からあった池を広くしたもので、伝左衛門田に引く用水の溜池であると。

- (13) 一〇月二四日 雨快晴 午前単独。陣内調査。
- (14) 一〇月二七日 雨快晴 午後単独。陣内再調査。

注

(1) イガドン谷(イガドの谷) 水源は、日嶽山頂に至る東廻り道から地図二の標高点一一六・八 m を過ぎて、杉山の谷あいへ左折して登るのでなく、逆に右折して、杉山の谷を約一四〇 m 下れば、岱明町と玉名市の境界線上、等高線九〇 m と八〇 m の間にある。ここに両面に築地村・睦合村境界と刻んだ二〇 cm 角の境界石がある。岩の下からしみ落ちる水が、一口の昔の水車場に流れて玉名市浦田川の源流となる(平成五、八、二七、岡本委員談)。

なお城跡実地踏査について、玉名市史編纂室長西田道世の助言を得た。

(2) 頂上巨岩の間から昭和五六、二、二六に土器片二個、平

成二、一、一一に三個、今回調査の平成四、一二、一六に一個、同五、三、二〇に四個を表採した(写真三)。土器片の色はうすい茶色と赤茶色、うす手、肌は砂まじりである。大きい方で四・八〜三・一×六・五厚さ〇・五、五・一〜三・四×五・一〜三・七厚さ〇・六(Cm)。二つに刷毛目がある。

日本考古学会々員田添夏喜に見てもらった(平成五、一一、五)。土師はじそのものではないが焼き方は土師に近い。刷毛目があるので、永祿より新しく、天正より古いか天正にかかる頃のものであろう。ふだんの生活に使った物とは思えないので祭祀に使ったのではないか。壺の類であろうとの事であった。天正(一五七三〜九一)年間或いはそれ以前であれば、大野氏が日嶽城を守っていた頃ではないだろうか。

(3) 山崎一著『群馬県古城址の研究』上巻(群馬県文化事業振興会、昭和四六、一二、一〇)七頁。

(4) 伝左衛門田は大字開田の小字、古城一帯の南側、浮田池の上手に当る。『玉名郡村誌』には、デンジャアダとルビを振るが、門田をカドタ、モンデンと読めば、中世武士の居館の周辺部に広がる直営田を言い、通常下人・郎従に耕作させていた。小作の例もあった(日本史用語大辞典一五九頁)。

(5) 地図二で古城南東斜面、標高点五六・六m〜五九・二m方向に對し、この東の小丘五一・八mより水田の低地を越えて、実弾射撃を訓練したのではないか。

四 城跡遺構と略測図

1 日嶽城跡

所在地 熊本県玉名郡岱明町大字開田字小代

城跡遺構は、字小代の日嶽標高二〇一・三m、比高一六九・三mの山頂、及び山頂下の東と西の斜面、及び北尾根に所在している。日嶽の頂上は単一で狭いが、その斜面は概ね急で要害の山相をなす(一帯は個人の分割所有)。

略測図一(日嶽城跡)によって、山頂と東より右廻り順で説明していく。(略測図一と二は、岱明町基本図一―一と一―一三、二五〇〇分の一を拡大し、等高線もこれに依った。山頂の本丸と呼ばれるI郭は、概ね標高一九八・〇m前後(遊歩道工事用地図による)、比高一六六・〇m、北々西―南々東を主軸とする瓢箪形に削平され、長径四二m、短径(ふくらみ部)二五mを計る。I郭のほぼ中央部より南西半分以上にかけ、高さ横中とも一mを越える花崗岩の大岩が五、六〇個重なり合っていて偉観を呈する。

I郭の東側はゆるい斜面で、II郭は三段の平坦地よりなる。上段の郭はI郭より五m落ちで細長く四〇m×六〜八m、中段はこれより五m落ちで二五m×一二m、下段は三m落ちで二五m×二〇m。三段の各郭の南端は連絡して、上段郭から腰郭状にI郭下の斜面を取巻く。II郭より

(6) 肥後文献叢書第三卷所収 新撰事蹟通考卷之二十六系図之十四大野三九五頁に依れば、大野三郎は紀国隆の三男秀隆のこと、本稿第二章大野(紀)氏系図(試案)参照。

(7) 同右注(6)、卷之二十三系図之十小代三五頁。小代八郎は、野原莊地頭職に補任された重俊の祖父行平で、源頼朝に仕え、功があった。重俊については、「宝治元年六月補二肥後玉名郡野原莊ノ地頭一因來レ任子孫築二城於筒嶽一本村一為二居城一」とある。

宮崎滔天著『三十三年の夢』(文芸春秋社 昭和一八、四、三〇)二四頁には「小岱八郎の居城たりし七面峰を東に眺め、夕に白浪脚底を洗ふ有明灣を隔てて、」とある。(七面峰は小岱山の異称。)

(8) 「はじめに」の注(2)に同じ一五三頁。

同じく注(3)三二〇頁に、城館址の所在を間接的に証明する地名として、堀ノ内、城ノ内、館、馬場その他を挙げている。城内の小字名は本町大字高道にあり、高道城については本稿で触れている。陣内の小字名は、玉名市内旧中村及び築地村にある。前者を中村館跡(玉名郡村誌)、後者を築地尚直館跡(熊本県の中世城跡)としているが、共に大野(紀)氏の支流である。

又別に、『日本城郭大系』一八巻一八七頁、玉名市岩崎字池田の岩崎城は、本年表に出る大野岩崎太郎の城跡か。

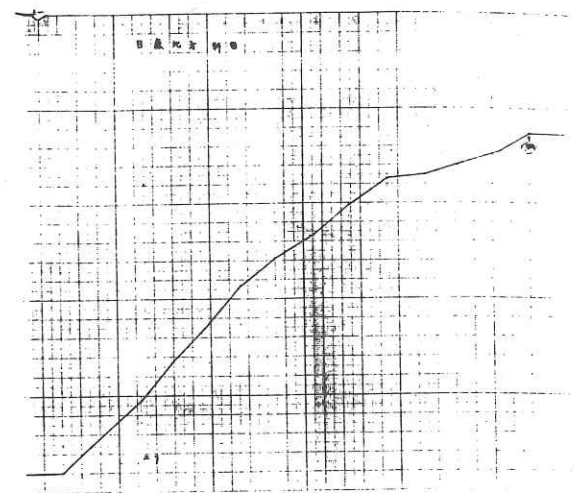
東へ二〇m程下って三日月状の郭三〇m×八mが見下ろされる。

南面は中腹まで、上ってよじ登り難い急斜面で、豎堀などの遺構は存在しない。

I郭の西を登って来るのが大手道で、I郭に達した虎口(城砦の出入口)が大手口と考えられる。(追手口とも書く。東の堀手口と共に、平成五年二月の遊歩道整備以前もこの二ヶ所だけが、頂上平坦部への出入口であった。中世の大手口は、一般に南面が多い。東北や西南は鬼門と考えて避けたといふ。)大手口を八m下った大手道⑥両側に、狭く細長い腰郭が見られるのはこの大手口を固めるためのものか。原形より今は相当崩れていると思われるが、大体次の広さである。大手道の南に長さ二八m、北に一五m、共に巾三〜四m。これより五m落ちで、北へあと一段の郭は二七m×三〜四m。

⑥の北の郭北端より二m落ちで、⑤を経て下の谷④まで三二mの内、⑤の部分二二mの西側には、北へ土塁・豎堀・土塁・豎堀の順で複合して西方向へ下ってゆく。最も南端の土塁は高さ一m、上巾二m、長さ五m行って、急斜面を下ること七m。中の土塁も同じ高さとして、長さ三m行った急斜面より、一二mと一四mの土塁二股に分かれるので、その間に更に一条の豎堀が生ずる。この二つめの土塁の両側に、上面巾二m、深さ〇・五mの豎堀があるので、豎堀

は計三条となる。北端竪堀の北側は、土壘状に盛上がる途中から、④より西へ下る谷へ、急斜面となって崩れ落ちる。I郭東堀手口より、堀手道は東、そして北へ下って又東に折れようとする。その西に堀切②が今は通路となって、積んだ落葉が踏みしだかれているが、概ね上面巾三m、深さ一m、底巾二m、長さ二六mであったかと考えられる。堀



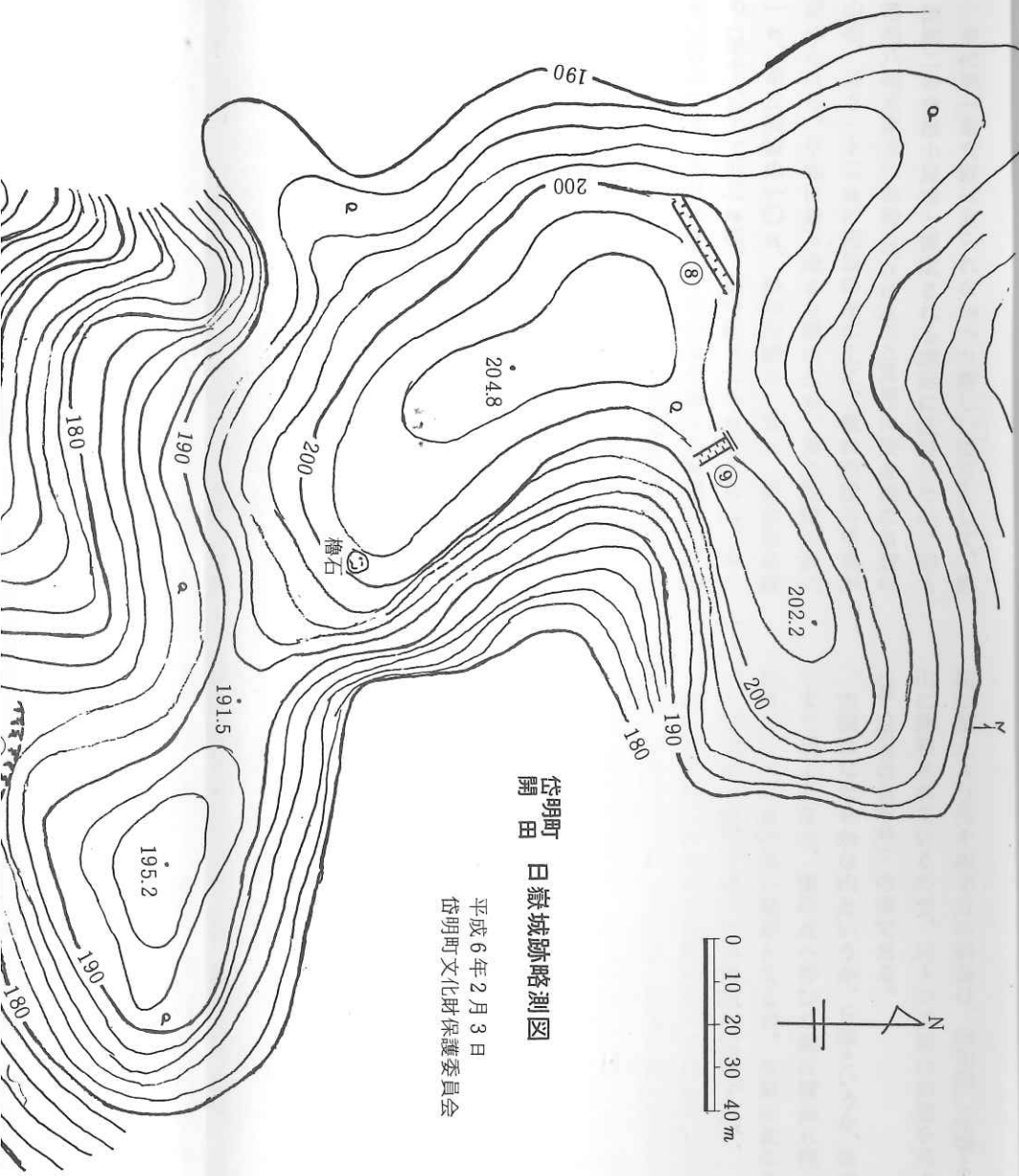
資料四 日嶽北方斜面
②堀切より頂上I郭柵までの傾斜
岡本委員 作図

切より頂上I郭柵までは、二五・四m行って一七・七mの高さ。七合目までの傾斜角度は四五度である(資料四)。木に掴まらないと登ることは出来ない。堀切②の両端は切って落とした竪堀のように、東西に急谷が下り、日嶽城防御の要害となっている。

堀切②より北③方向へ、ゆるい傾斜が標高点一八四・七mを過ぎ、上って一旦下った所で、堀切⑦と考えられる遺構がある。手前に〇・八m程の段落ちが横に一二m程の長さ、段落ちから底巾八m行って高さ五・六mの人工としか考えられない断崖に行き当る。ほぼ東西に長さ二〇mで、東は急に下り、地図記号で言う雨裂の絶壁が東の谷へ落ちる。西はやや急な谷が西の谷本流へ下る。

標高点一九五・二mの高地を下って、一九一・五mの低い広い尾根には、堀切その他の遺構がありそだが、認められなかった。日嶽より北へ二九〇m離れた距離に一つあった。それは櫓石より北西標高点二〇四・八mの、更に北西は五〇mの地点に堀切⑧。上面巾四・〇m、深さ一・〇m、底巾一・〇m、長さ二三・〇mで南西―北東方向に走り、尾根に直角に当る。

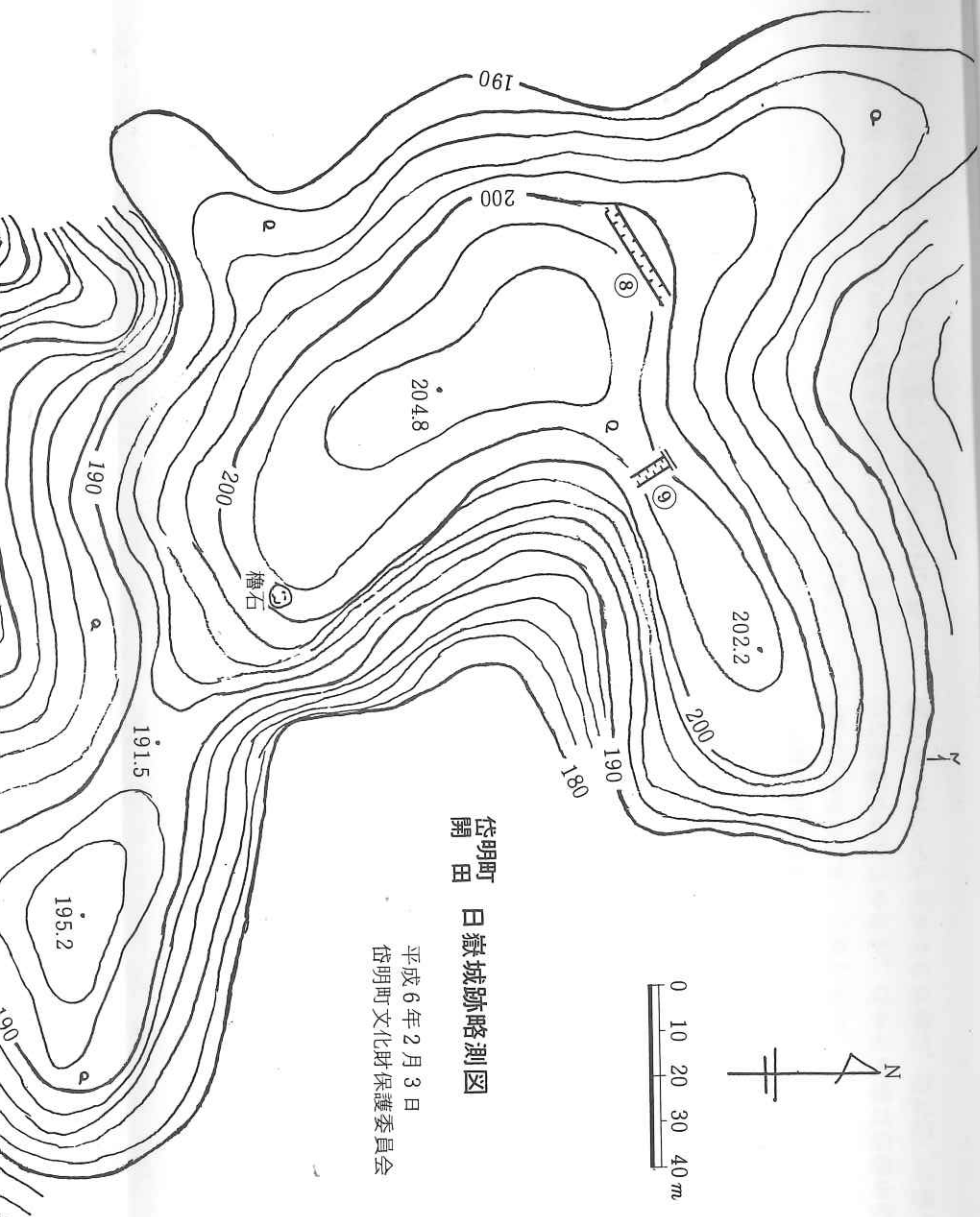
以上、北尾根には三条の堀切(横堀)を認めたのであるが、第二章に引用した諸文献の横堀とは、これらを指しているのだろうか。



菅野町 日嶽城跡略測図

平成6年2月3日
菅野町文化財保護委員会

第二章に引用した諸文献の権威とは、これらを守り
のだからか。



岱明町 日嶽城跡略測図
開

平成6年2月3日
岱明町文化財保護委員会

は計三条となる^③。北端堅堀の北側は、土塁状に盛上がる途中から、④より西へ下る谷へ、急斜面となって崩れ落ちる。

切より頂上I郭柵までは、二五・四m行って一七・七mの高さ。七合目までの傾斜角度は四五度である(資料四)。木

更に第一章文献に見られなかった新しい提言として、略測図二の⑩根小屋跡と推定される地形に注目したい。即ち箱崎八幡宮東方の低地(現在は水田と荒地)に突き出た日嶽の山裾、高さ一・二mの四段の崖の上に、概ね四段の平地が認められる。平地は最下段より縦巾三m、第二段縦巾計二一m、第三段縦巾一〇m、第四段縦巾一五m、総計南北縦巾(崖を入れて)五五m程、横巾最大三五m程である。東と南は数段の崖、西は数mから一〇mを越える険崖の下は谷川(右岸よりの深さ一・五〜二・五m)。平地の最北部は四〜五mの崖で遮断され、上は山の斜面が北の日嶽へ続く。現在は竹藪で、その以前は段々畑で小道があった。今は根小屋跡らしいものは何もないが、右の地形や位置、又陣内という地名から、日嶽城・古城に対する根小屋跡であると考えたい。

2 古城跡

所在地 熊本県玉名郡岱明町大字開田字箱崎

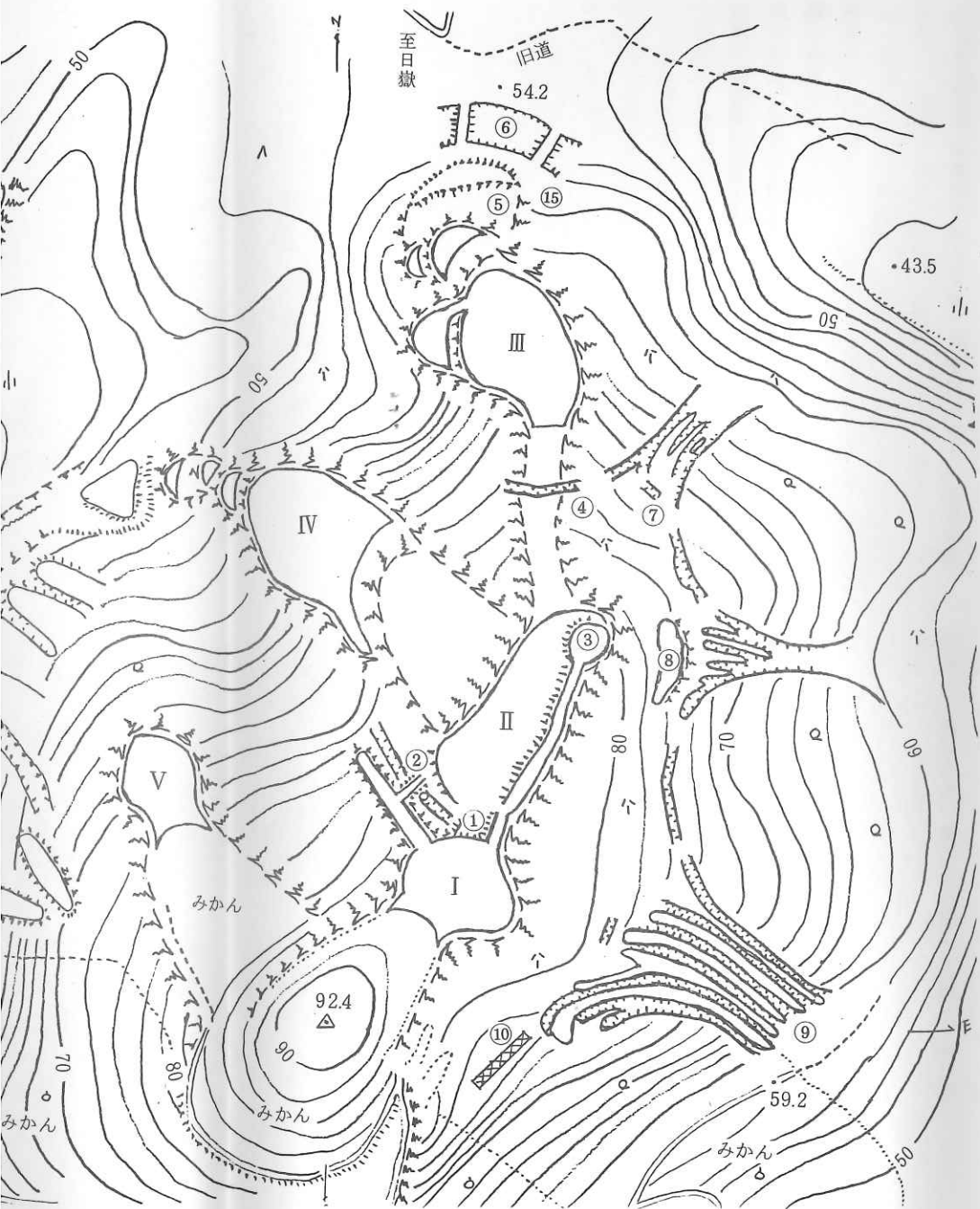
開田集落の北端の山麓、箱崎一番地に箱崎八幡宮が鎮座する。古城跡は八幡宮の東、字箱崎の通称古城標高九二・四m、比高六〇・四mの丘陵北半分に所在し、城域は略測図二(古城跡)の旧道⑨—⑩—⑪—⑫の取巻く範囲である。城跡はもと古城全域にわたったと考えられるが、古

城の頂上より凡そ南半分の斜面は、昭和四〇年頃よりみかん山に開墾されているので、以下の遺構は旧態を残す北半分(個人所有の自然林)の事である。

古城はなだらかな山というか、丘陵というか、ほぼ南西より来て頂上となり、更に北へ伸びた端は標高五四・二m、比高二二・二mの低い鞍部となるが、次第に北に立ち上がった斜面は、前項で述べた日嶽城跡に達する。

以下略測図二によって説明する。三角点標のある古城頂上は、ほぼ三段の同心円的段々畑状のみかん山になっていて、広い平坦地はない。この現状からすれば、築城時の作業力では此処を削平することなく小高く残し、ここに物見櫓を立て、城内外の監視をしたと考えるのが適切であろう。

この場合I郭とその南西、同高のみかん山が主郭(本丸)の役を果たしたのではあるまいか。I郭は二八m×二五m、この北端虎口より土橋①(スケッチ一、上巾〇・八m、長さ八m)が斜めに下ってII郭へ架かる。坂土橋である。この坂土橋のすぐ西側下に、I郭より二m落ちで五m×四mの平地がある。周囲より低く、古城のほぼ中心で、虎口にも近いので、武者屯(武者溜り)であった可能性がある。この平地より二m下がりで始まる堀(上面巾三m、深さ二・〇m、底巾一・〇m)が、一二m下った所に下の土橋②がある。(土橋は工事の際わざと掘り残したものである。)この下の土橋②は、



スケッチー 古城の坂土橋①

I郭の北西端より上巾二・〇m、堀底よりの高さ五mの土塁が一二m下った地点で北東へ架かり、上巾〇・七m、長さ三・〇mである。(土塁はこより下に更に一五m伸びる。)この土橋のすぐ上手下、北西へ下る堀の末端に、直径、深さとも〇・五mの穴がある。水抜樋として下の⑭方向へ水を吐いていたのかも知れないが、土橋の下に横穴らしいものは見受けなかった。或いは天水を保存するための溜め井だったかもしれない。

坂土橋①を北へ下るとII郭は、五六m×一八mと北東へ長い。この郭の東側を上巾二・〇m、高さ〇・五mの低い土塁(低土居)が長く走る。城の存立当時には土塁上に柵や



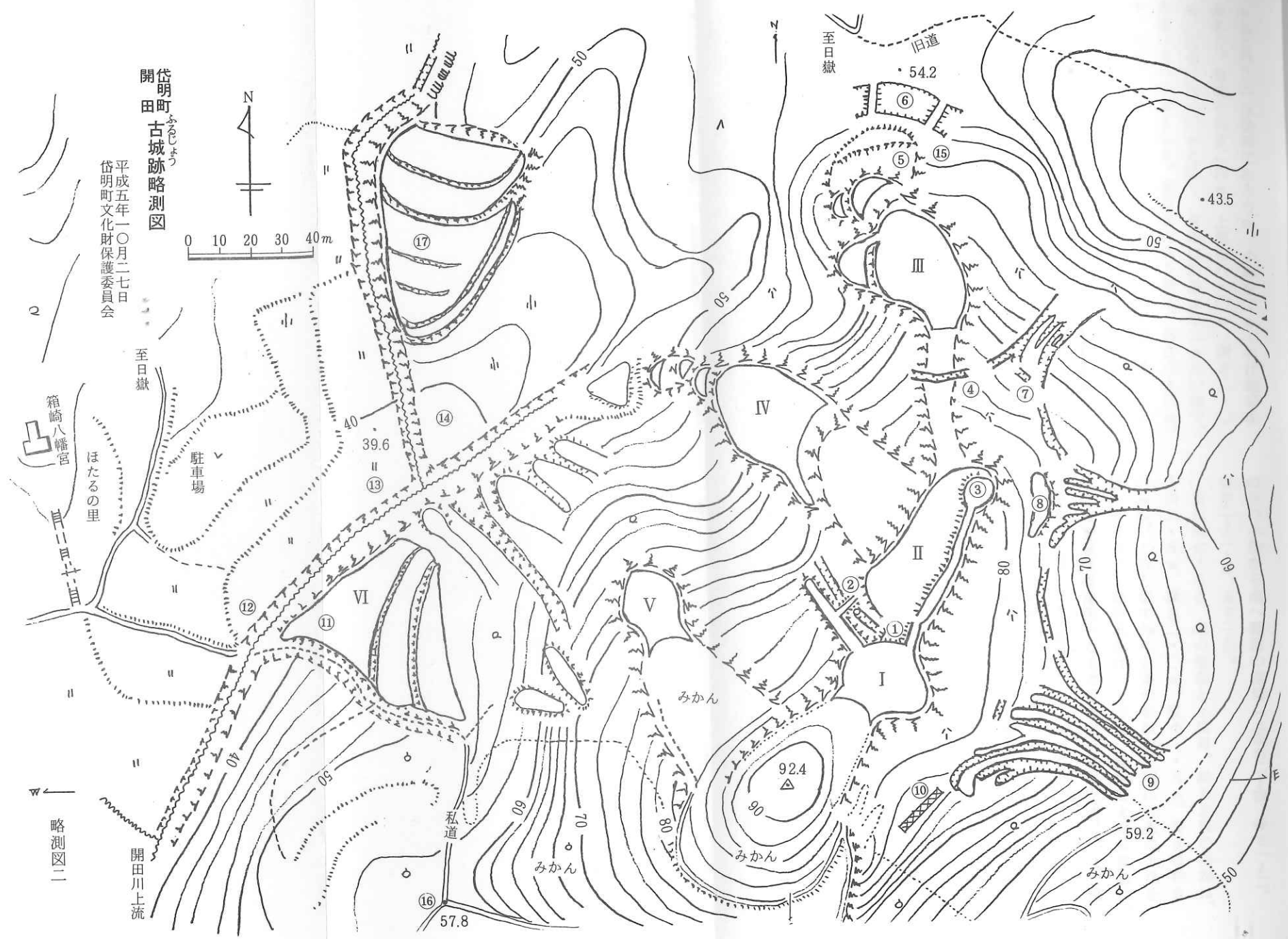
スケッチ二 古城鞍部の堀切④

③より北へゆるい傾斜を下った鞍部に堀切④(スケッチ二)がある。上面巾四・〇m、深さ三・四・〇m、底巾〇・五m、長さ二・〇mの箱葉研堀。④を越えてIII郭は三九m×二五m程の楕円形で、西下の郭(一五×七)へつながる。この郭から④堀切の西出入口へ攻めて来る敵に、横矢を射かけることができる。この下北方に見える小郭二つ(一五

さかもき
逆茂木が設けられていたのだろうか。土塁の北端③は高さ〇・八mで直径八mの円形をなす。(原形は正方形か)この微小高地は櫓台跡と推定される。微小高地の四隅に柱を立てて櫓を組み、城の内外を偵察したり、侵入者を射撃するには適切な位置にある。一種の隅櫓というべきか。

長い。この郭の東側を上巾二・〇m、高さ〇・五mの低い土塁(低土居)が長く走る。城の存立当時には土塁上に柵や

この郭から④坂の西へかけての間に、この下北方に見える小郭二つ(一五
かけることができる。この下北方に見える小郭二つ(一五



開田町
古城跡略測図

平成五年一〇月二七日
岱明町文化財保護委員会

略測図二



①

さかもぎ
逆茂木が設けられていたのだろうか。土塁の北端③は高さ〇
・八mで直経八mの円形をなす。(原形は正方形か)この微小
⑥

×七と六×二は捨郭であろうか。小郭を二m下げれば堀切⑤がある。東西に長さ二四m、上面中八・〇m、深さ二・〇m、底巾は四・〇mと広く、東端は旧道より二m高い崖で、西端は谷への崖となる。堀切⑤の向う側は、高さ二〜三m、横の長さ一〇mの三日月形の土塁で、山裾を削り残したと思われる。堀切は通常尾根の鞍部に設けられるので、この位置には特別な意味があったのではないか。即ちⅢ郭からの昇降口を見通させず、又敵の直進を阻むための葦土居(かかし)とするため掘り切ったのではないか。土居の下をめぐって④から④へと旧道が古城をめぐっている。⑥の溜池は一六m×一〇m、深さ二・〇mで、古城を守る空壕か、或いは水濠の役を果すかと思われたが、後で聞けば後世の溜池という。

池の両側の塘道は旧道と同等で、北へ日嶽城に連絡できる。堀切④より東へ遙か下る谷は、南より下る谷と合流して、三重、四重の堅堀の役を果たす。⑦は小さな堀切(上面中二・〇、深さ〇・五、底巾一・〇、長さ五・〇)。⑦より下北東三角洲状地は明治頃甘藷畑。⑦の南のゆるい鞍部にも浅い堀切(上面中二〜四、底巾一・五〜二・五、長さ一五・〇、中央部が広い)。⑧は小郭(二〇×六)。⑧郭の東に五本指の谷とも仮称すべき自然の谷がある。五条の谷は自然の堀とも、人工の堅堀とも判断し難い。北端の堀は、上巾六〜三m、深さ北東側三・〇m、底巾二・〇m、長さ二四m。五本指

の谷の小指から南へ鞍部の堀切(上面中二〜四、深さ一〜二、底巾二〜二・五、長さ二五)。
更に南に下ると、⑨の堅堀と土塁群。最も北東の堅堀は、上巾二・五m、深さ二・〇m、底巾一・五m、長さは約五〇mか。これと似て外に五条の堅堀が、間に五条の土塁を挟んで並ぶ。土塁の上巾は二・〇m。堅堀と土塁の複合は、先に日嶽城跡略測図一の⑤で見したが、此処のような、人の横移動を不可能にさせる堅堀群を、「敵状空堀群ないし敵形阻塞」と呼んでいる例がある。⑩は古いみかん山の石垣。
眼を転じてⅡ郭の北西はゆるい傾斜を以て下る途中から、急に一〇mの段差で、Ⅳ郭は三四m×三二m。ことと南西の広い谷は二〇年程前は甘藷畑。この北西突端下は三つの小郭(一五×七、一五×八、六×三)が、間に各二〜七mの崖をもち④方向へ下る。Ⅳ郭より南々東へ広い谷を隔てたⅤ郭(二〇×一五)は、南東のみかん山へ同じ高さで続く。昔は一と続きの郭であったろうか。Ⅴ郭より西へ、谷や堀をへだててⅥ郭は三段となっており、上段から東西の中一〇m、中一〇m、巾二〇mで南北の長さは約五〇mか。⑪は第三章聞取の住居跡。

注
(1) この記述と異なり、第一章3「玉名古城道筋山川村高」

結び

に、開田村古城は「本丸東西二拾五間 南北拾八間」(四五
m×三二・四m)とあったが、これでは東西を長径とする瓢
箆形となり現状に合わない。「南北二拾五間 東西拾八間」
とすべきに方角を取違えたのではないかと思う。

(2) 第三章注(3)に同じ、二七頁。
(3) 右注(1)と関連して、同じ史料の記述の「南ノ方ニ立
掘三通り有云々」という南も、本文で記述したように西が正
しいのではないか。

(4) 小室榮一著『中世城郭の研究』(人物往来社、昭和四〇、
一一、二五)二八六頁。

(5) 右注(2)に同じ七頁。

(6) 右注(4)に同じ、二八七頁。

(7) 右注(4)に同じ、二八三頁。戦国時代の天正年間(一
五七三〜九二)頃から、さかんに使用され始めたという。

(8) 野上毅編集発行『朝日百科 日本の歴史5 中世II』
(朝日新聞社 一九八九、四、八)二九七頁。

三二七頁には、新潟県朝日村大葉沢城の五四条の堅堀を畝状
に連続させた縄張図。

三二〇頁には、北九州市花尾城の一二条と九条、更に一一條
の堅堀の連続的防御線の縄張図を掲載している。

の一地図には、標高の数字「九二・四」だけ出ていて古城
の名はない。岱明町基本図一―三には、古城九二・四と
出ている。地元ではフツジョウと発音し、城が下(じょう
がした)の地名が残っている事も既に述べた。

戦国時代には、小屋、屋敷、砦、城郭など防御・戦闘の拠
点はすべて「じょう」と呼ばれたので、城に関する地名は
各地に多く残っている。玉名市伊倉片諏訪には中ん城の地
名が残る。本町大字上も(大野)下村に対する上村であつた
のを、城村の意味で上村と呼ぶようになったのではあるまい
か。

現在古城は、字箱崎の山(丘陵)一帯の呼び名であるが、此
処に、古城と言ひ伝えた中世の山城があつたので、何時か山
の名に転用されていったものと思う。本稿では九二・四m
の丘陵全体も古城と呼び、其処にあつた城も、他の呼称を用
いないで古城、或いは古城跡と呼んで、文意によって使い
分けてきた。古城を古城と読み誤らないためには振り仮名
が必要である。

(2) 本丸と二の丸

日嶽城を本丸、古城を二の丸と呼んだ例は、第一章『玉
名郡誌』の引用文中にあつたが、この呼称は、徳川期平城
を主とした時代、一つの城郭内で、城の主体である郭を、
一の丸、二の丸、三の丸(四の丸は縁起上無い)、或いは

1 城の呼称について

(1) 日嶽城と古城

『熊本県の中世城跡』には、先に第一章に引用したよう
に、日嶽城については、「城跡は日岳の頂上部分と南麓の小
城(こじろ)の小名を残す小山から成っている」と述べてい
る。日嶽の地名は、国土地理院の五万分の一地形図玉名には
出ていないが、明治一〇年頃の「玉名郡古城道筋山川村高」
には開田村古城とあるように、開田村にあつたので日嶽城
を開田城とも呼ぶ。明治一〇年頃、開田村に字陳内(陣内)
があり(資料二)、今も古老はジンニャーと呼ぶ所が根小屋
跡であろう。

古城という呼び名は、地元では慣用されているが、諸書
に見る事はなく、本稿で初めて用いたものと思う。冒頭に
引用の小城の名は、何処から来たか不明であるし、地元では
聞いた事はない。又既に述べたように広い規模の古城を、
小で表わすのは適切ではあるまい。これは古城の古を小と
書き違えたのではないだろうか。古城は国土地理院五万分

西の丸などと呼んだのを、中世の山城に遡って用いたのだ
という。六〇〇mも離れ一城郭内とは言えない日嶽城と古
城を、本丸・二の丸と呼ぶのは適当ではあるまい。日嶽城
と古城は一城郭内でなく、互いに独立しつつ補完し合う本
城と支城と考えたい(後述)。

(3) 鶴城と亀城

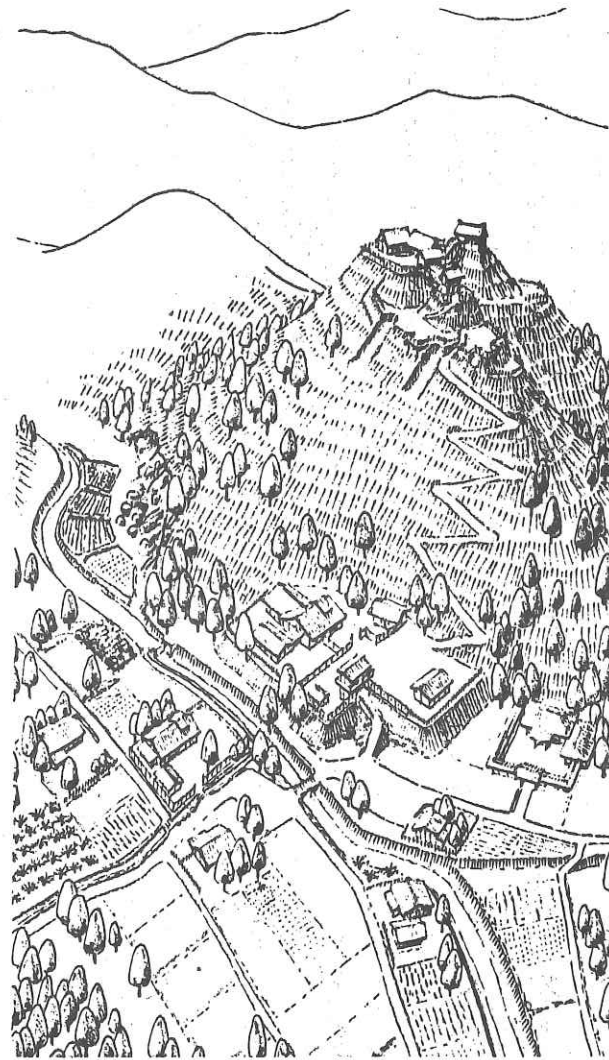
日嶽城を鶴城、古城を亀城と呼ぶ事についても、第一章
文献に既に引用した。略測図一(日嶽城跡)を見れば分かる
ように、日嶽城I郭を鶴の胴体と見、東のII郭と西の土塁
を、広げた両翼にたとえて、飛翔する鶴の姿と考えたので
あろう。

略測図二(古城跡)では、東の伝左衛門田の湿田と、西の
小字稲繁の水田に四肢を踏ん張って、北へ頭(III郭)を上げ
た形の城の縄張りを、亀と見做したのであろう。即ち鶴城と
亀城とは、地形の要害性を最大限に利用した両城の特徴を、
よく言い表わした一種の美称である。この美称は他所にも
例があつて、この名だけでは、何処の城かの地名の特定は
できない。

2. 日嶽城と古城の性格について

右に見た本丸・二の丸、或いは鶴城・亀城という呼称の
組合せは、戦術的に相互に連繫強化し合う意味が込められ

ている。中世の山城を築く上で、一城別郭の城と、別城二郭の構えがあると言⁴う。日嶽城・古城の場合は後者に近いと思うが、我々は鶴城を本城、古城を支城と考える。しかし支城と言っても古城は既に見た様に、郭・堀切・土塁・堅堀など、重複した構造を持ち、力の籠った築造ぶりであり、充分な戦闘力を期したと考えてよい。



根小屋と詰城想像図 山上には戦時に詰める山城が、その麓に根小屋と呼ばれる居館がある。詰城の方は建物は小さく簡単で、最高所に櫓が建つ。下の段に開けられた虎口(木戸)の傍に堅堀が、それを隔てて横矢がかりも見える。ここからジグザグの坂道で根小屋に下りる。こちらは恒常的な住居なので建物も立派だが、まわりに柵、門前に堀を配し土橋を設けている。

イラスト 藤井尚夫

資料五 根小屋と詰城想像図

朝日百科 日本の歴史 第5巻中世Ⅱより転載

次に城の立地から言えば、山城・平山城・丘城・平城などと分類される中で、日嶽城は山城である。日嶽は独立した山でなく尾根続きの女山であって、城は急斜面をもつ頂上の狭い削平地を中心に築かれている。構造からいえば、本郭を挟み、一線の方向に数郭を配列した(古城とは異なる)並郭式の城に近いだろう。

古城も山城である。が斜面がゆるやかで、規模の広い地形という定義からすれば、丘城に含められる。広い頂上面と斜面に、多くの郭を縦横に並べた列郭式山城⁵と言っているであろう。

しかし最も重要な事は、日嶽城・古城が根小屋式山城だということである。大野(紀)惣領家が何時の頃か、旧睦合村・下村・鍋村方面を主として領知するようになり、上村城(既述)を居屋敷と定め、周囲を土塁や空壕で固める。そのまわりに聚落ができる。南北朝の動乱が激しくなるにつれ、軍事的要塞としての山城、最後の背水の陣を布く詰めの城(要害城)が必要となった。日嶽を選定し郭や堀切を築き、支城として古城を補強する。

本城日嶽城は戦時とはともかく、平生、城主の住む所(居城)としては不適當である。そこで戦闘の場合最後は日嶽山頂に櫓籠るが、平時は最も近い山麓で生活する場所、これが根小屋である。日嶽城の場合、略測図二の④の舌状山裾台地を、段々に削平したのである。即ち日嶽城・古城の中間的位置、西側の谷川等の要害度、水の便、日当り等から言っても、誠に好適の場所であろう。しかし根小屋との断定は、その地形と位置、陣内という地名からだけで、物的また史料の根拠には欠けるが、引用掲載したイラスト(資料五)を見れば、納得頂けると思う。

3 築城・廃城の時期について

南北朝の動乱期(一三三三—一九二)に山城が出現するようになり、郭・堀(空壕・水壕)・堀切・土塁・堅堀・さらにはもっと細かな防御施設の構築や配置によって、築城の時期を考察する事が専門的には出来るが、一般には難しい。又日嶽城の遺構はごく簡単であるので、築城時期の特定は難しいだろう。略測図一の中では⑤、略測図二では⑨の複雑な土塁と堅堀の複合は、応和から戦国期にかけて強化されたものだろう。この外、略測図二古城跡の③櫓台跡、⑤葺土居らしきものなど、特徴的な遺構と思われるが、これらも一旦築城の後、逐次追加されていったものか、遺構を見ただけでは断定できない。日嶽城より古城の方が新しく、増設もされ、多人数の居住を可能にしたのであろう事は考えられる。

では歴史的にみて築城の時期はどうか。既に第二章冒頭その他にも述べたが、紀国隆三男秀隆或いはその子孫はいづ、旧村睦合村・下村・鍋村方面を領知するため、上宇馬場原の台地端に移ったかは、分からない。現在此処を上村城跡と称している⁶。高所に櫓台をもつ土塁や空堀をめぐらし(現存)、館を設け、近くに若党作人が住み、専門的武士として弓馬の練習に励んだのであろう。馬場原や隣接した大字三崎に、馬場或いは陣の地名も残り、矢止め天神の伝承

が残る。南北朝時代大野氏は南朝に、小代氏は北朝に従った。特に正平三(一三四八)年、菊池武光が征西大將軍官を迎えて官方の旗幟をより鮮明にしてからは、いよいよ戦備怠りなく、日嶽や古城を築城し、守りを強化して行ったであろう。小代氏といずれが先とは言えないであろうが、小代氏の筒嶽城も南北朝時代(一三三五~九二)に築かれたのであろうとする。菊池武尚(武光の弟、高瀬氏の祖)が高瀬に進出し、保田木城(山城ではないが)を築いたのも正平九(一三五四)年頃と考えられる。しかしその後第二章年表に見るように、九州の官方は大宰府を追われ、大野伊勢守紀光隆の死去の以前に、その所領の一部二五町が小代氏に宛行われるなどした。そこで大野氏は益々その守備を固め、日嶽城を根小屋式山城として完成したが、次の大野出羽守紀朝隆であったので、応永一〇(一四〇三)年頃の日嶽城主として、特にその名が記録されたのではないだろうか。その後戦国時代に入って、中世の山城は量的に質的に最盛期となった。

廢城の時期は、大野氏滅亡の時期であって、第二章の最後に述べたように天正九(一五八一)年二月~三月上旬と推定される。

以上日嶽城・古城の築城は多分南北朝時代で、その後も城の増強を図ったが、廢城は天正九(一五八一)年三月上旬

注

- (1) 第三章注(3)に同じ五一頁。徳川時代になって一國一城の制がとられ、小さな堡砦はみな廢止され、残った大規模な城郭を「しろ」と呼ぶようになった。
- (2) 右注(1)に同じ五八頁。
- (3) 高山彦九郎紀行文「筑紫日記」寛政四(一七九二)二月二五日の条に「右の方宇土山の下に鶴ノ城亀ノ城とて小西行長の城趾崗に成りて見ゆ、鶴ノ城を本丸とすると覚ゆ、」
- (『文献集不知火』所収、玉名歴史研究会 平成五、七月学習会資料)。

(4) 注(1)に同じ、四二~四五頁。

(5) 右注に同じく三頁。

(6) 第四章注(8)に同じ二九三及び二九四頁。

又注(1)に同じ三九頁には、上村城を里城と見、日嶽城を要害城と見てよい考え方も示している。天正七年三月龍造寺勢によって小代実忠の守る梅尾城は落城し、小代実忠・親伝親子は筒岳本城に登って降伏した(第二章年表参照)。梅尾城は「小代城主の平時における居住地と見なされている」(『熊本県の中世城跡』六七頁)ので、筒岳城は詰めめ城(要害城)、梅尾城を里城と考えられる。

(7) 注(1)に同じ三九頁。四〇頁には、根小屋は城将の外、その城を守る人々の居住区としている。

と考えれば、存立期間は概算二〇年間、廢城から現在まで四一〇年を経過したことになる。何時しか城主大野氏の事も、戦さの事も忘れられて、わずかに城跡の名だけ残ったのであろう。

最後になったが、史料の御提供や御指導御協力を頂いた多くの方々に感謝し、又この二つの城跡を町の歴史遺産として、今後破壊することなく、子孫に伝えたいと思うものである。(追記とも文責門岡)

追記

岡本委員より、日嶽城跡北方に堀切を見つけたと知らされたので、二人で一月三〇日(日、時々曇)に調査した。

日嶽東廻り道を、日嶽頂上へ左折することなく直進して、旧陸合村財産区西端の旧道(地図二には出ていない)を進み左折して(一九五・二m高地を迂回)、斜面の谷を進み、略測図一の堀切⑨に達した。堀切北西端には、北東方向に土橋がかかり、長さ三・〇m、上巾一・〇m、高さ〇・三m。向う側は急崖。こちら側南東方向の堀切は、長さ一四・〇m、上巾六・五m、深さ二・〇m、底巾二・〇mで、あとは谷となる。この堀切⑨は標高点二〇二・二m方向に、堀切⑩は本善坊方向に対し防衛したものと思われる。以上を追記する。

第四章注(8)に同じ二九三頁・二九四頁。

引用イラスト資料五は二九四頁より。

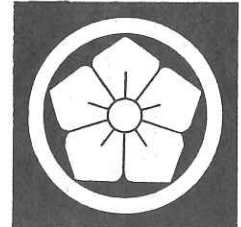
(8) 大野惣領家旧陸合村方面所領というのは、第二章年表終りの方の、浅野長吉(文禄元年長政と改名)より加藤清正あて、推定天正一五(一五八七)年書状写(小代文書)に、「御朱印地*大野上村・下村之事、下総守=被成御預」とある。小代氏によって滅ぼされた大野親祐の所領大野別符の上村と下村を、小代下総守親泰に預けるようにと書かれているのである。上村とは現在の岱明町大字上をはじめ、西照寺・庄山・古閑・開田・三崎(友田・林田)を含み、下村は大字大野下をはじめ鍋・扇崎及び旧中程(中土の内、土器屋は高道村の内であった)までを含んでいた。上村城のあった上村がこの方面の中心地であったのだろう。築地・前原・野口(尾崎を除く)・高道(滑石を含む)・山下は紀国隆次男築地国秀の所領となったようだ。

(9) 一の11、『熊本県の中世城跡』五四・五五頁。

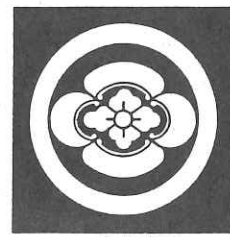
大野祐宏七五歳談(平成五、一〇、一六)。大正七年頃のこと、大字上字馬場原の上村城跡に住む大野姓を「六軒屋敷」と称した。上村城は日嶽城の出城で、大野氏は小代八郎と戦って、滅亡したと伝える。現大野敏捷宅の曾祖父久太郎が庄屋を勤めた。重藤の弓の一部(長さ一・〇五m)を所蔵。家紋は隅切り角に木瓜。近くに五輪塔十数基が残る。わ



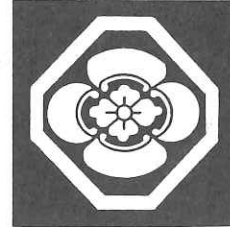
イ、丸に六輪べっ甲
むつわ



ロ、丸に桔梗
ききょう



ハ、丸に木瓜
もっこう



ニ、隅切り角に木瓜
もっこう

諸家の家紋

資料六

が家の曾祖父文吉が大正七年字西松手に移転する前、「カブトのタマヨケ」と称する金銅製如来立像（総高三・七cm）を屋敷内で拾った。（戦乱の時も持ち歩いた陣仏、また念持物と言われる守本尊である。）外に陣地設営用の陣鎌（刃部二〇m、柄の長さもと一m、今二〇cm）、と菊池千本槍の柄一・四五mだけ所蔵する。家紋は丸に木瓜と言う。

因みに大野氏関係四家の家紋を掲げる（資料六）。イは、玉名市・熊本市・深田村の前原家々紋。前原猪一蔵陣笠

より。（歴史玉名第一〇号、平成四、九、三〇発行、門岡久前原家所蔵の武具・系図を参照。）ロは、玉名市滑石大野家の家紋（大野フサエ・大野友清に依る）。ハは大野祐宏家の、ニは大野敏捷家の家紋。ロ・ハ・ニの図は、能坂利雄編著『日本家紋大鑑』（新人物往来社、昭和五四、九、二〇）より引用した。

所で大野惣領家の家紋は何であったかを考える時、第二章初めの方に述べた「紀宗善大野家由緒書上」の中に、紀国隆男子三人の幕紋について、「大野三郎秀隆ニハ六葉龜甲」と述べている事に注目したい。六葉龜甲は前原家々紋の六輪龜甲の事であると思う。当時は、はとわの使用区別がなく、又龜と龜を同義の文字として用いたのではないだろうか。大野惣領家の家紋丸に六輪龜甲を、紀国隆二男築地二郎国秀の三男秀親を始祖とする前原家に於いては、使用したものと思う。

上村城跡のほば南西四〇〇m、大字上字長津野、もと大野氏菩提寺大悟山平等寺跡墓地内に、伊勢守紀光隆云々と刻銘する五輪塔がある（年表参照、岱明町指定文化財）。

（10）荒尾市文化財調査報告第一集『浄業寺と小代氏——浄業寺調査報告——』（荒尾市教育委員会 一九六五、二、二八）四頁、松本雅明。